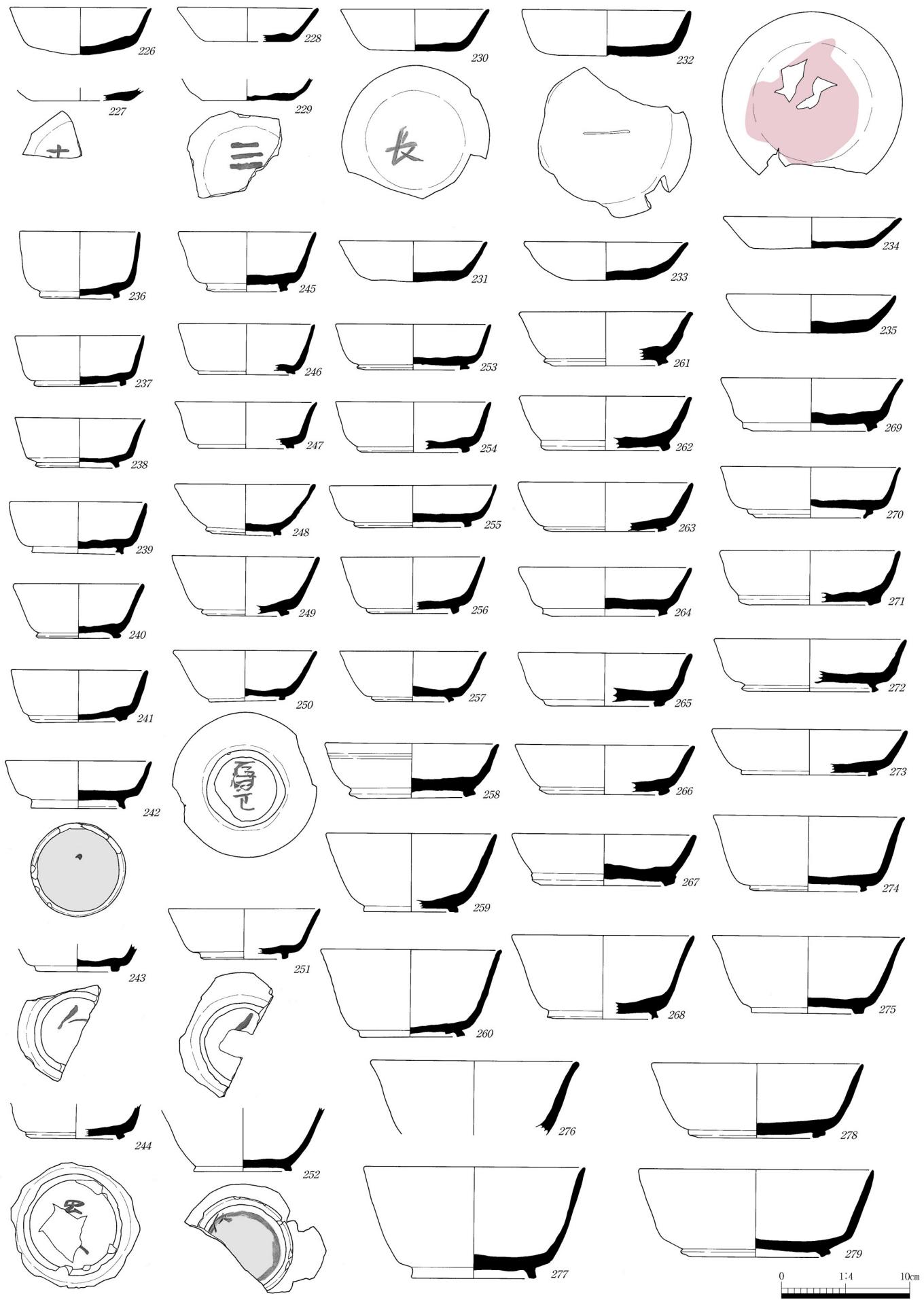
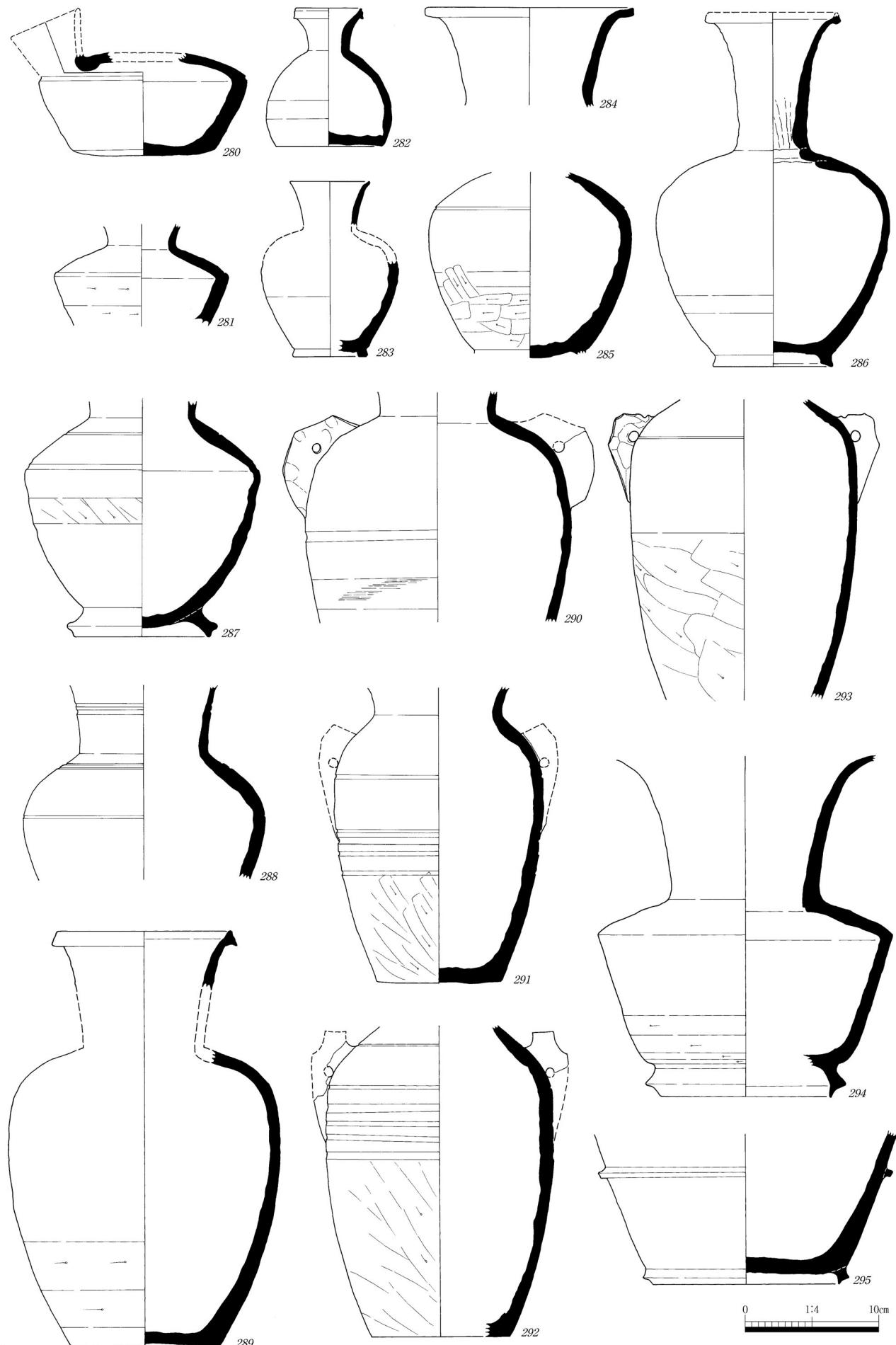


第214図 遺物実測図

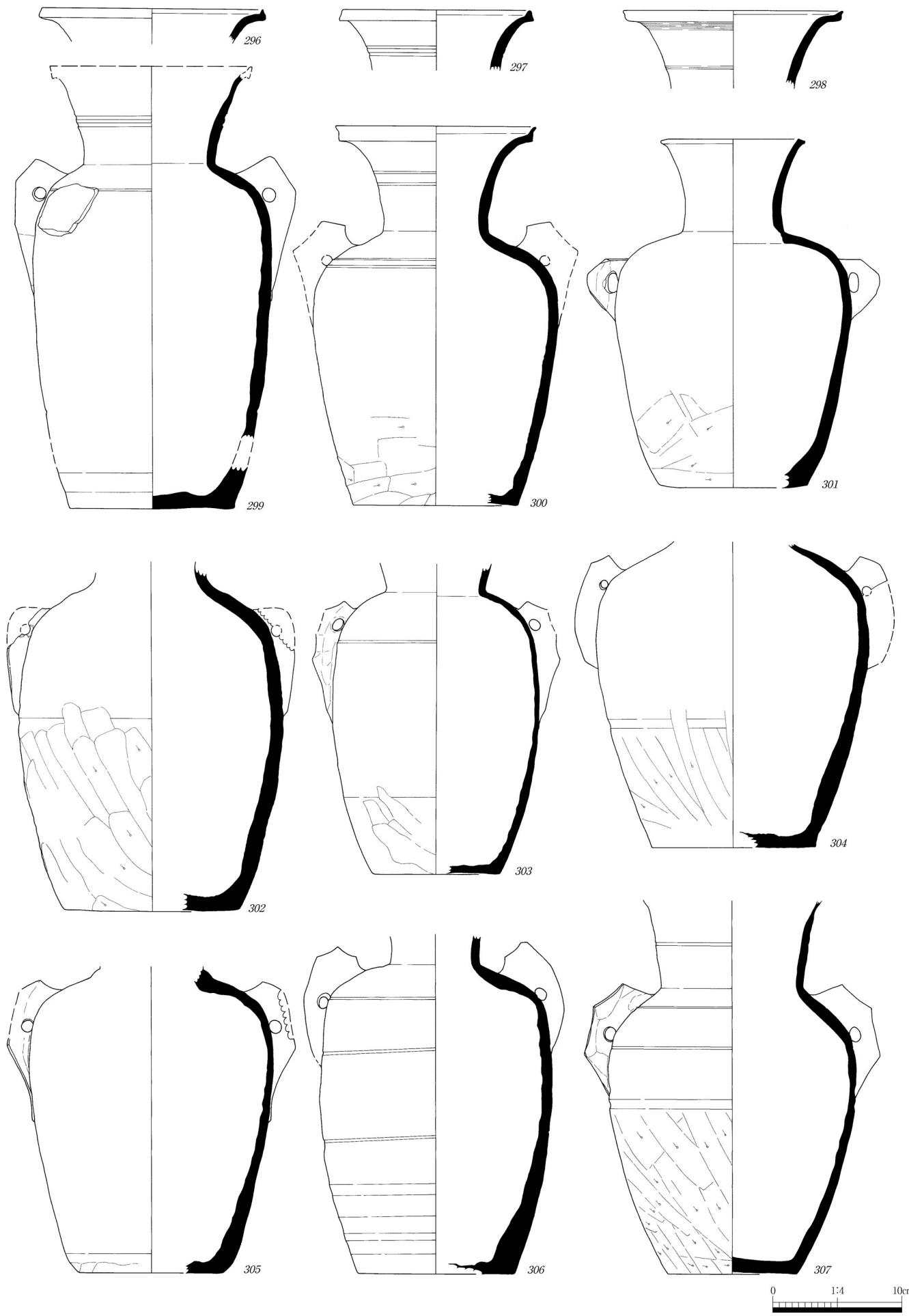


第215図 遺物実測図

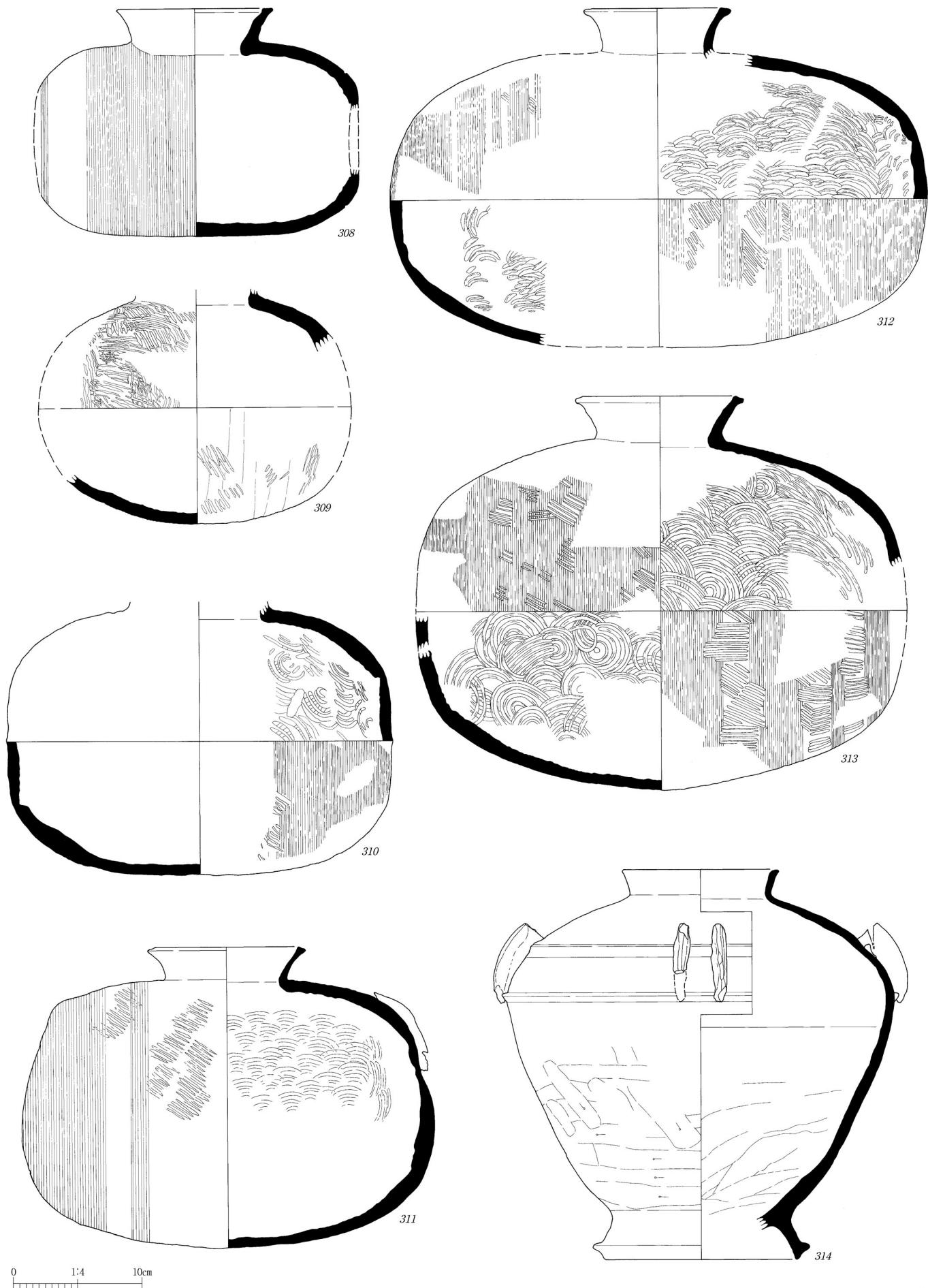
4 遺物



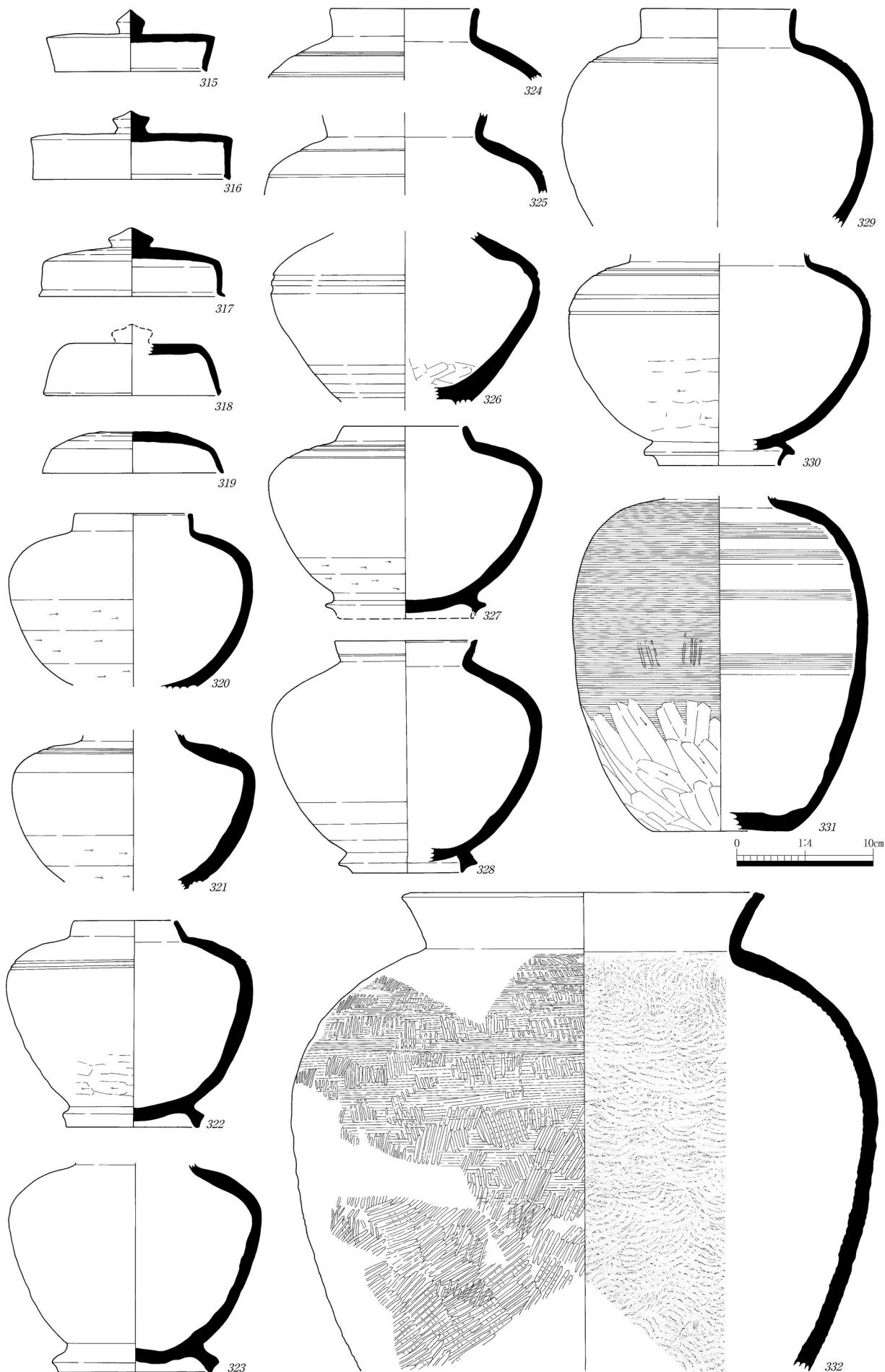
第216図 遺物実測図



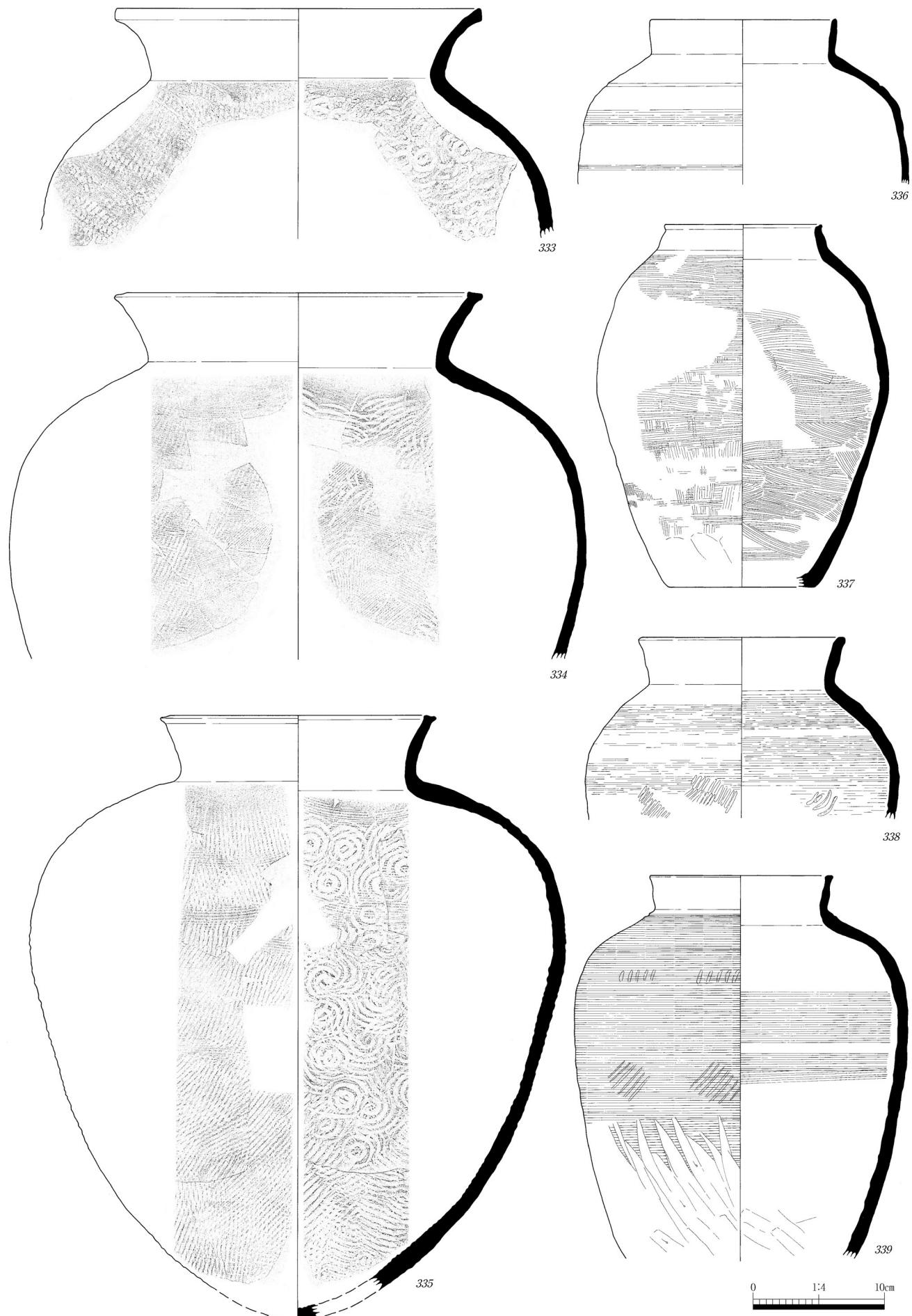
第217図 遺物実測図



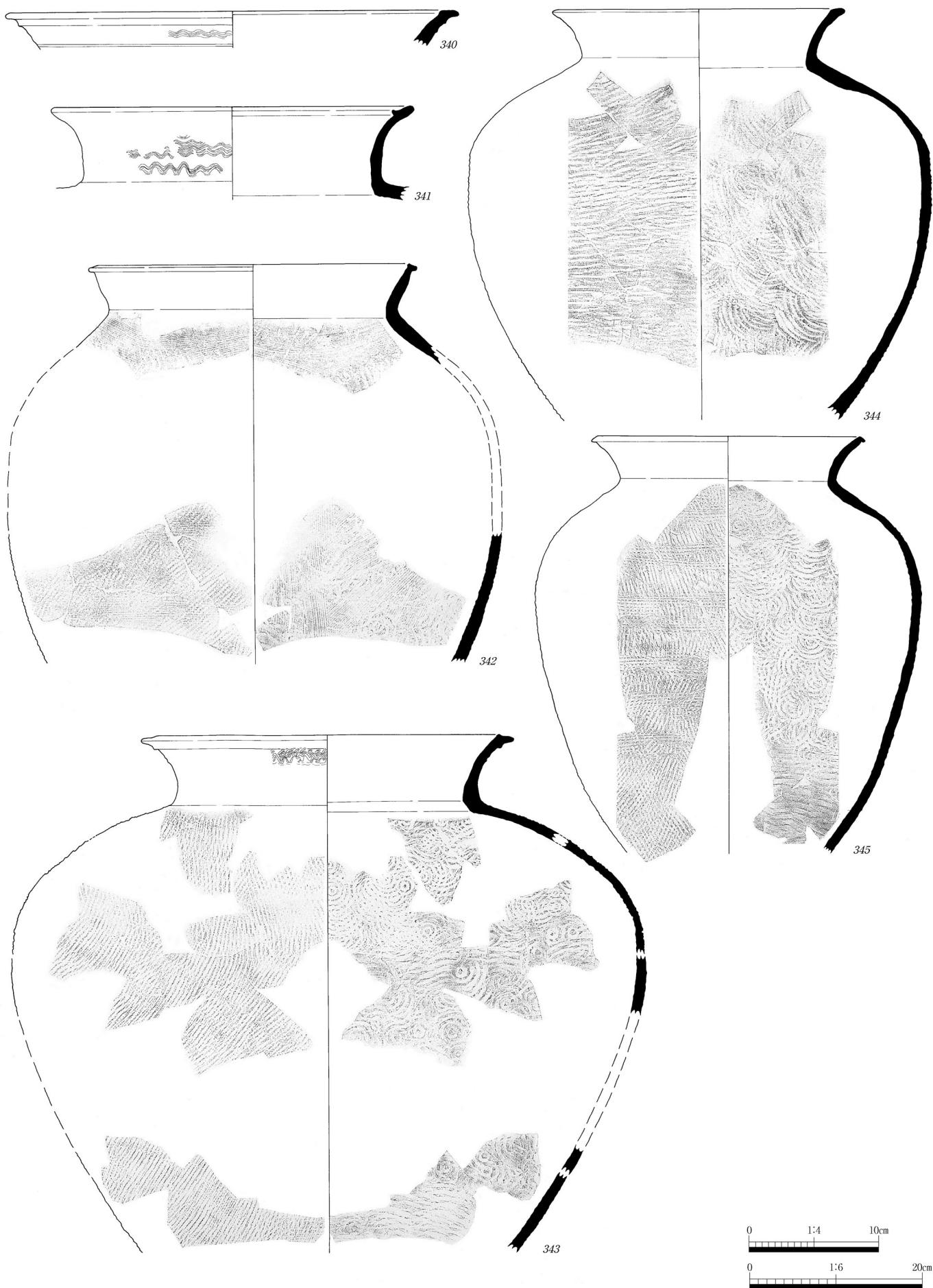
第218図 遺物実測図



第219図 遺物実測図



第220図 遺物実測図



第221図 遺物実測図 (340~342・344 1/4, 343・345 1/6)



第222図 遺物実測図 (346・347・349 1/4, 348・350 1/6)

に、横方向のハケメがみられる。

332～335、340～350は甕。体部全体はタタキ調整され、上半部にカキメが残るものもある。334、344、348は張り出す肩部から底部にかけて細くすぼみ、倒卵形を呈する。335、343、346、350は肩の張り出しが強く、350の肩部には、焼成時に複数の杯を重ね焼きした痕跡がある。340、341、343は口縁部から頸部に波状文がみられる。347は体部中位に環状の把手一対が付く。

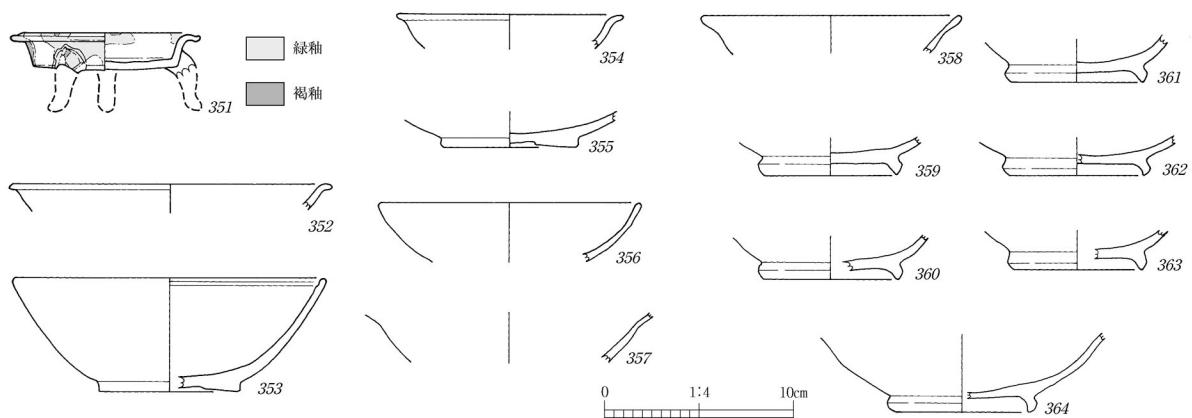
須恵器の時期は8世紀後半～10世紀初頭まで幅広い形態が出土している。概ね古代下層が8世紀後半～9世紀前半、古代上層が9世紀中頃～後半と考えられ、古代中層はその中間的な様相を示す。ただし、C地区出土には若干古相ながら、上層として扱ったものも含んでいる。

施釉陶器（351～364）

351は小型の三彩火舎で、内外面に緑釉、褐釉、透明釉が掛けられる。三足の獸脚が付くとみられるが、付け根部分以下は欠損している。内面底にはスヌが付着しており、使用の跡がうかがえる。県内で三彩が出土している遺跡は多くないが、隣接する任海宮田遺跡C地区ではやや大ぶりの火舎が出土している。

352～355は緑釉陶器の椀。352は硬陶で、淡緑色の釉を薄く塗る。353は口縁部内面に1条の凹線が入る軟陶で、底部は削り出した蛇の目高台である。355も同様の高台をもち、釉色はやや黄色味がある。

356～364は灰釉陶器。ほとんどが小片で、C4地区からの出土が多い。357は皿とみられ、精良な胎土をもつ。その他は椀で、359～364は高台が断面三日月形を呈す。359の底部はヘラ削り後、高台を貼り付けている。363はSI301C4からの出土で、高台部分に一部スヌが付着している。364は高さのある三日月形高台が付くが、胎土には砂粒が目立ち、体部には焼き膨れが生じている。



第223図 遺物実測図

土師器 (371~540)

椀、皿、高杯、甕、鍋、甌などが出土した。出土状況は須恵器と同様、堅穴建物の密集部分で包含層から多量の破片が出土したが、大半は帰属する遺構が不明である。また、須恵器に比べ摩耗が著しいため、接合不可能であった破片数も多い。

器種名は概ね北陸古代土器研究会誌に拠り、このほか煮炊具の分類については任海宮田遺跡発掘調査報告および内田亜紀子氏の分類^{註2}を参考に記述した。

371~384は皿。380、384を除き、すべて堅穴建物からの出土である。

371~378は無台皿で、糸切り底から体部がやや外反気味に開く。口縁端部はやや肥厚するものと、薄く挽き出したものに分かれる。377はSI 1 A 1 出土で底部に穿孔がある。378はSI 201 C 2 出土で外面にススが付着する。

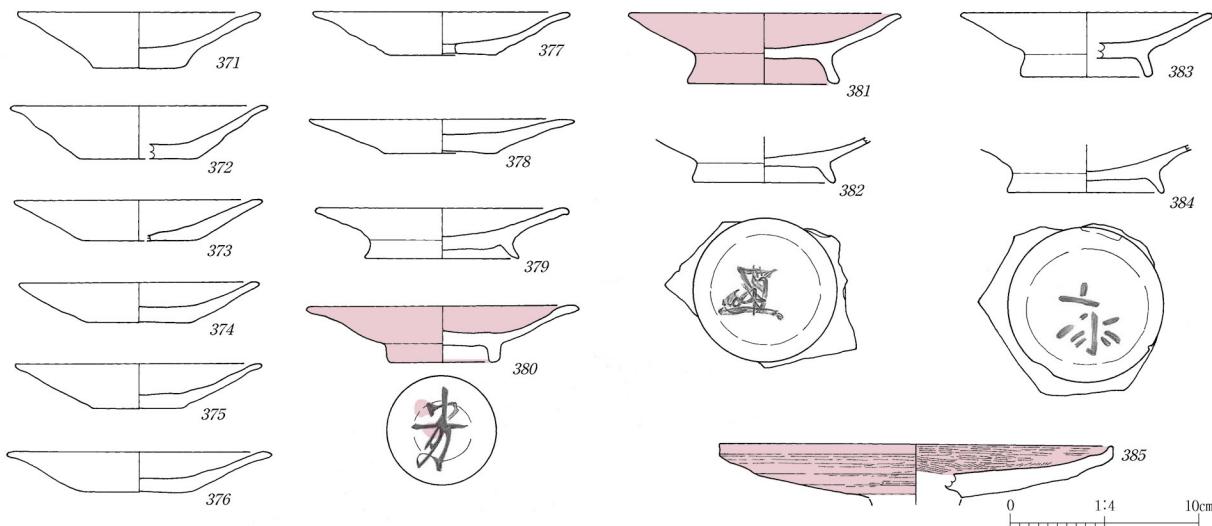
379~384は有台皿。380は赤彩され、直立する高台内に「貴」と墨書される。口縁部がやや肥厚している。381は全面赤彩され、高台は外傾する。382、384は高台内にそれぞれ「通?」、「家」と読める墨書がある。

385は高杯。口縁端部が短く立ち上がる。内外面とも赤彩およびミガキが施されるが、外面では口クロ挽きの盛り上がった部分にのみミガキ調整がみられる。

386~438は椀。431、439は有台、その他は無台。底部糸切りが主体である。法量は口径11~12cm台にまとまりがある。15cm台がやや多く、それ以上の大型品については資料数が減る。

386、387は内面を黒色処理され、外面には纖細なミガキが施される。389は体部下方にケズリが巡る。428は古い様相をもつ赤彩品である。大きな底部から緩く立ち上がり、やや絞り気味の口縁部が短く屈曲する。436はやや大型品で、底部付近に透かし状の孔5つが等間隔に穿たれている。

墨書されたものについて、388は体部外面に横位で「□繩?」。400は内外面赤彩で「家」、413は内面に部首の「人」部分か。414は底部外面で記号とみられる墨書がある。430は内面見込み部を除き全面赤彩される。底部には糸切り痕があり、浅い形態は皿とみられる。外面全面に多文字が書かれるが、文字の方向は左回りや倒位など一定ではなく、文字の大きさにも統一性がない。「家」、「大」のように見える部分もあるが、ほとんどが判読不能で文字か否かも不明である。管見の限りでは類例が見当たらないが、ここでは習い書きしたものと推測する。



第224図 遺物実測図

440～524、531～534は甕。口縁部の残りがよいものを中心に掲載しているが、形態から多少の時期幅が想定される。

古相を示す450～457、523、532は体部内外面をハケ調整する一群である。概ね外面が縦方向、内面が横～斜方向に調整される。450、456は口縁が短く、直立気味。457は甕の把手か。523の外面には肩部にカキメ、下半部にケズリがみられ、一群の中では若干新相を呈する。これらハケ調整の一群は出土地点に偏りがあり、SI 216C 2、SI 1195A 2から数点まとめて出土しているほか、A 3、A 4で散見できる。集落形成に先行する時期と考えられ、8世紀前半代に遡る可能性もある。

この他は概ね9世紀代に収まととみられる。法量が分化しており、口径10～12cm台を小型、13～15cm台を中型、18～25cmは大型にまとめられる。これらの甕は口縁形態により、以下の分類が適用できる。この分類はまた、口縁の形態変化を年代順に示すとも考えられる。

a類（440、442～444、469、471、475～477、506）：肩部との境で稜をもって外傾し、端部を丸く収める。体部上半にカキメが入るものもある。

b類（441、445、446、449、458～461、463～468、470、472、485、486、496、508～513、516、522、524）：aの端部を面取りして方形に仕上げる。また、その上端部をわずかに引き上げるものや端部を肥厚させ上下に拡張するものを含む。口縁部から肩部にかけてカキメが入り、体部下半は外面にタタキ、ケズリ、内面はハケが施される。

c類（448、478～481、487、488、497、500、501、518、533）：bの上端部を更に引き上げ、屈曲した端部が直立あるいは内傾する。体部はタタキで調整され、内部には当て具痕がみられる。小型では体部下半を削るものもある。

d類（447、474、490、493、499、502、503、517、519、534）：cに短く外傾する端部が付加される。体部は上半にカキメ、ケズリ、下半はタタキ。内面にはハケ調整もみられる。小型は外面下半を削る。

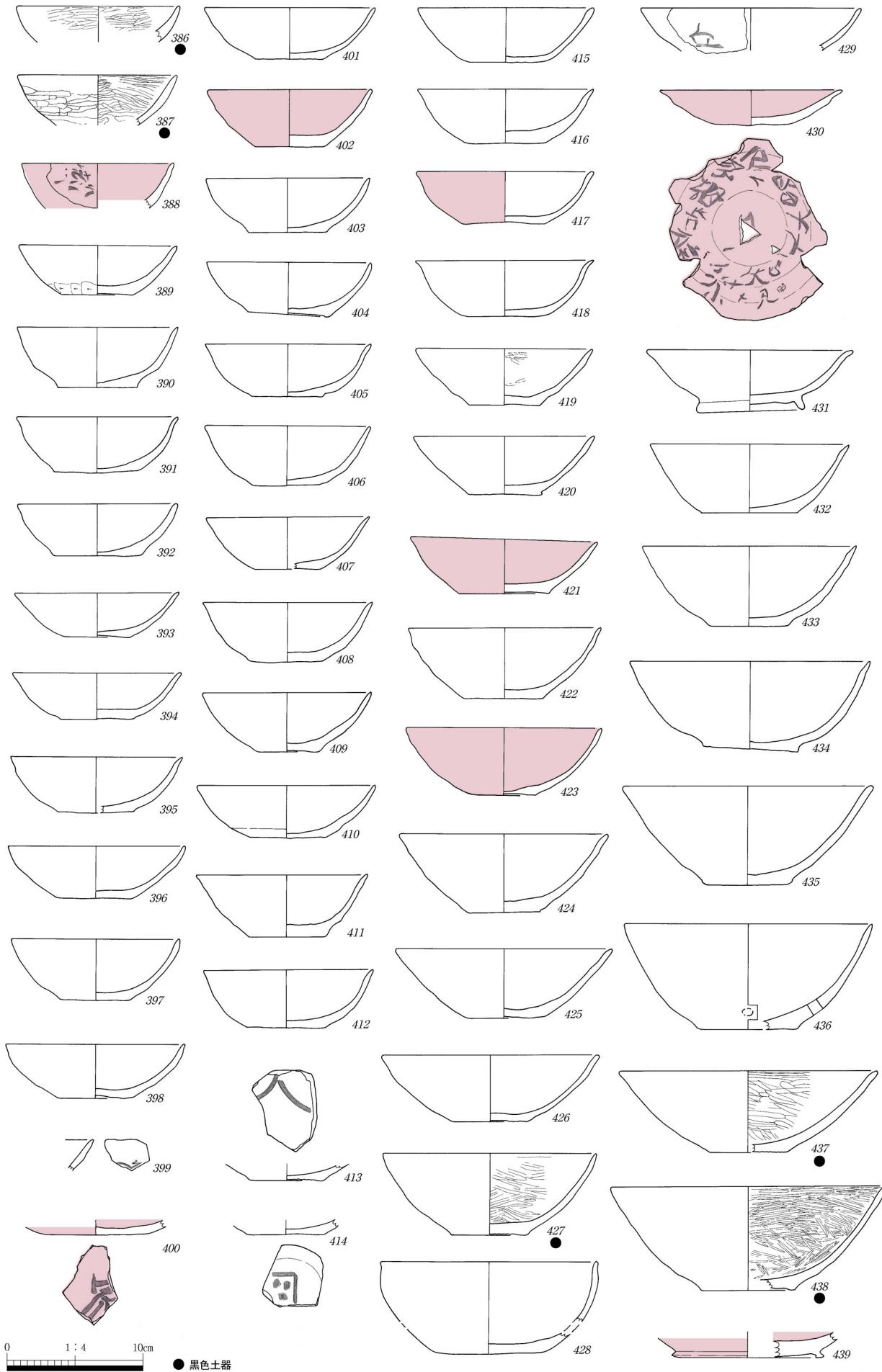
e類（473、482～484、489、491、492、498、507、514、515、520、521、531）：肥厚した口縁端部を内側に折り返し、丸く成形する。体部の調整はd類と同様だが、タタキの当て具は、平行線、放射状、同心円など多様化する。

また462、494、495、505は底部外面に墨書や線刻がある。505はSI 201A 3から出土した小型甕で、細密な線により「解中」？と刻まれる。

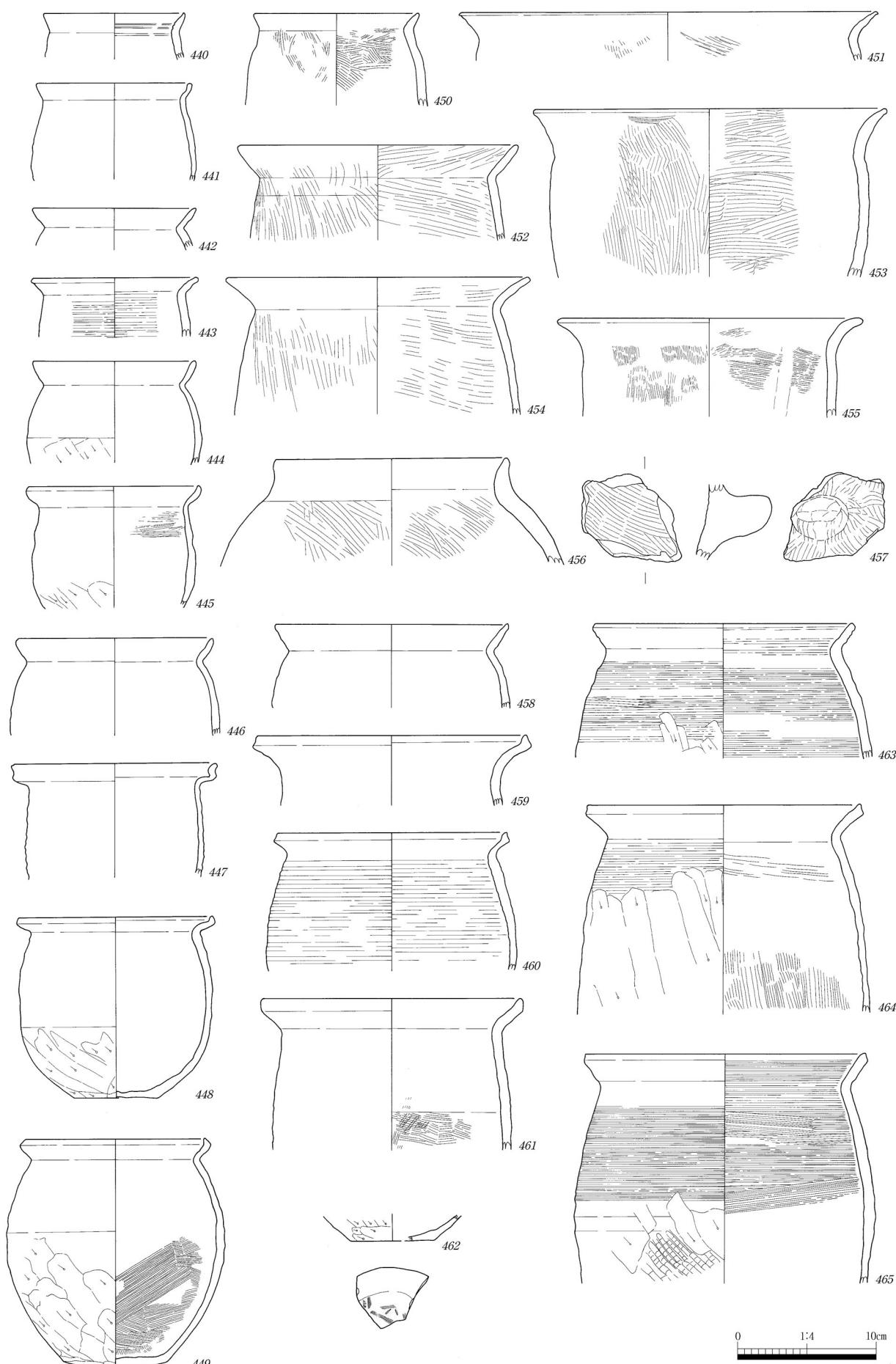
525～530、535～539は鍋。資料数はやや少ないが、口縁形態による分類は甕と同様で、b類（525～530、536、537、539）、d類（535）、e類（538）がある。

b類の外面は体部上半が口クロおよびカキメ、下半がケズリ調整され、丸い底部は器壁を極端に薄く造る。また、内面には細密なハケメが施される。e類になると底部にタタキが入るが、538は体部から底部の厚みがほぼ一定である。

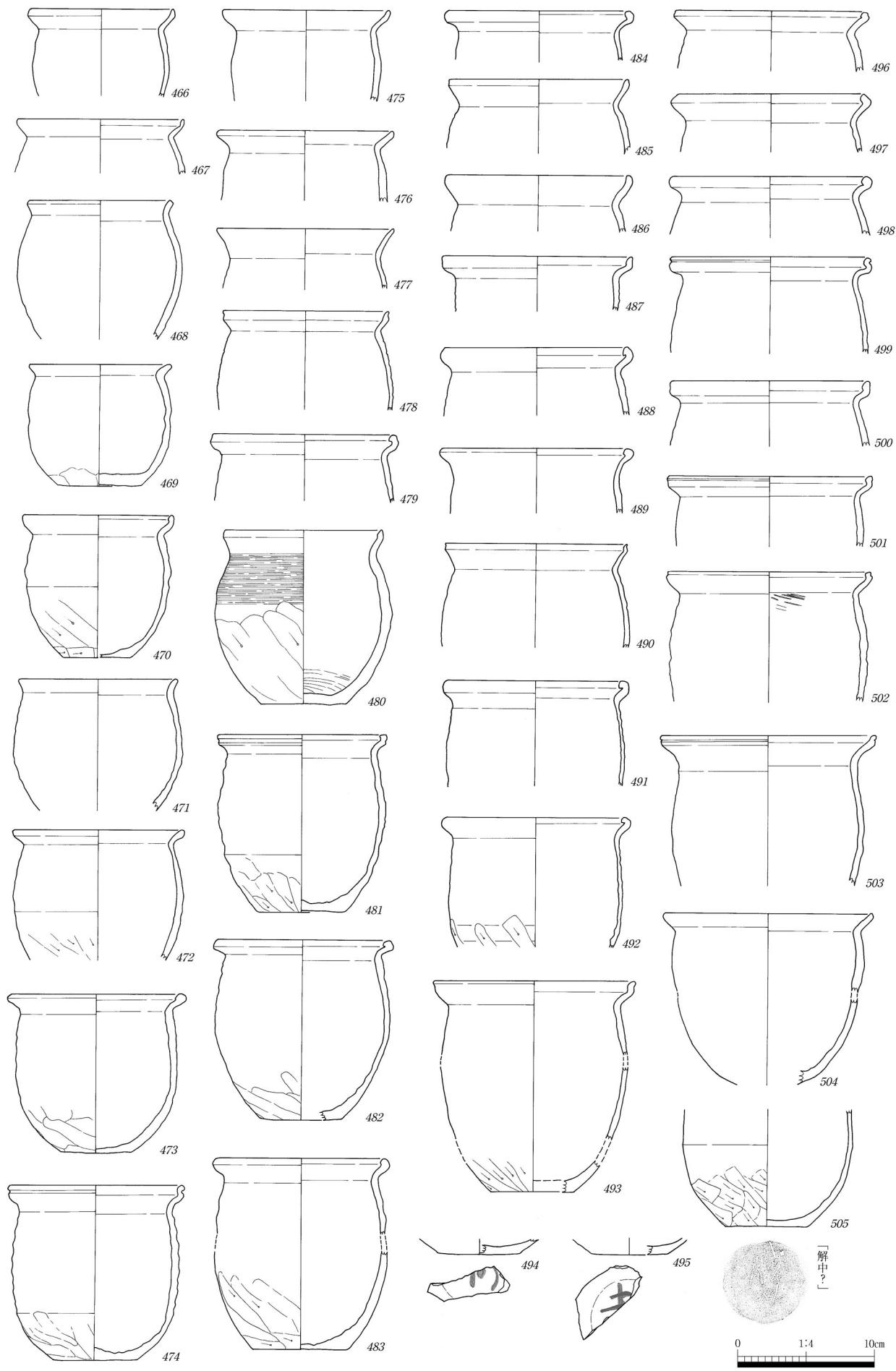
540は甕で、SI 675A 4から出土した。胎土は淡黄色だが、須恵器のように硬く焼き締まる。全体は寸胴形で、口縁部外面には肥厚帯が巡り、体部中位に一对の把手が付く。底部は甕の口縁を逆位にしたような形態で、稜をもって外に屈曲し、肥厚した端部は内折し段をなす。体部外面にはわずかにタタキの痕跡が残る。また内面下位には、器面の粘土を押し出した爪状の突起が3個対になって付けられる。甕の類例は射水市小杉流通業務団地No18A遺跡にあり、8世紀前半代が想定される。



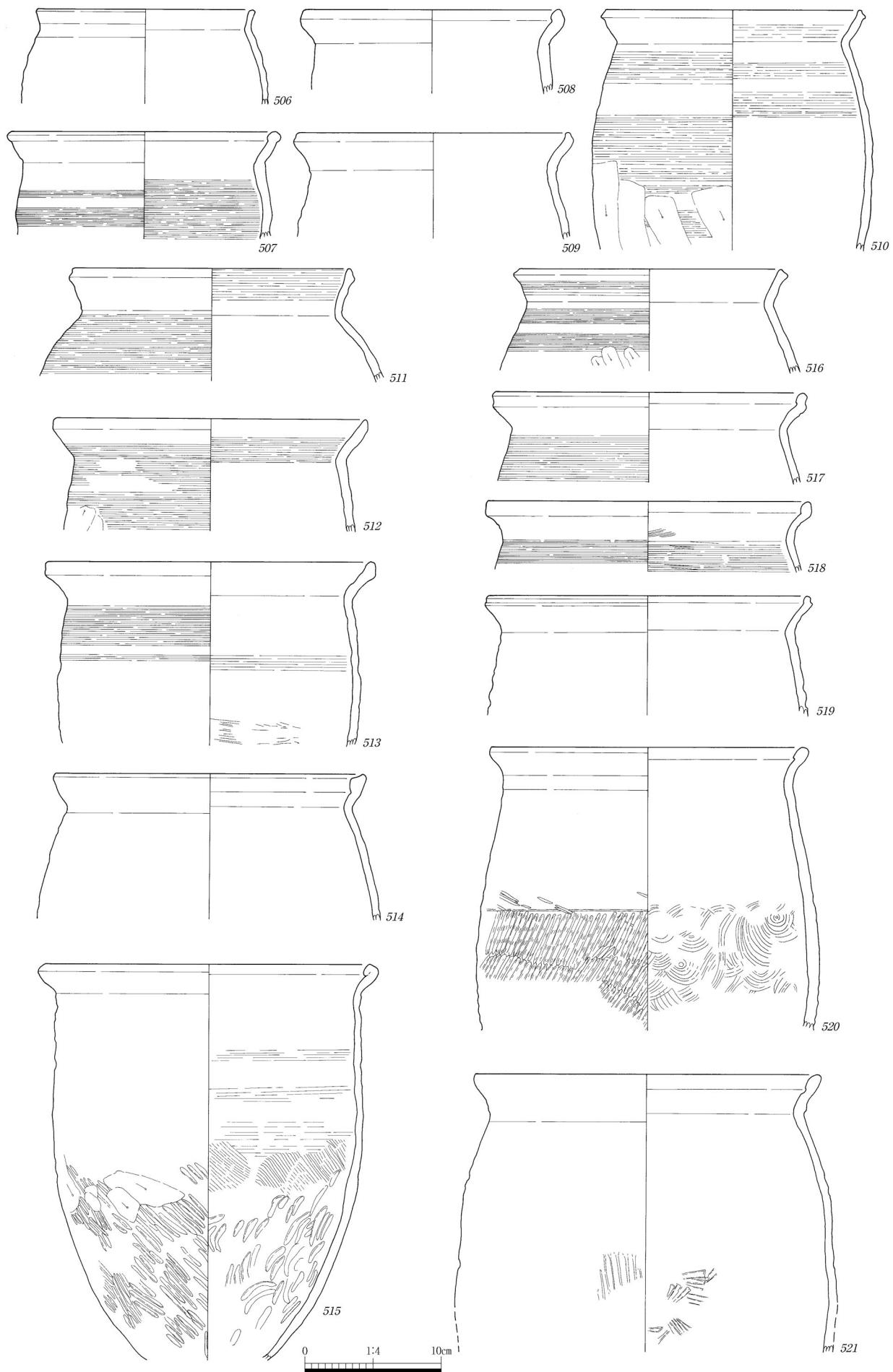
第225図 遺物実測図



第226図 遺物実測図



第227図 遺物実測図



第228図 遺物実測図



第229図 遺物実測図



第230図 遺物実測図

C 中世～近世（第231～254図551～1495、図版37～44・59～63）

中世土師器（551～1141）

多少の時期差があるが、全ての調査区で出土した。谷C6からの出土が群を抜いて多く、特に中世初頭とみられる資料がまとまっている。

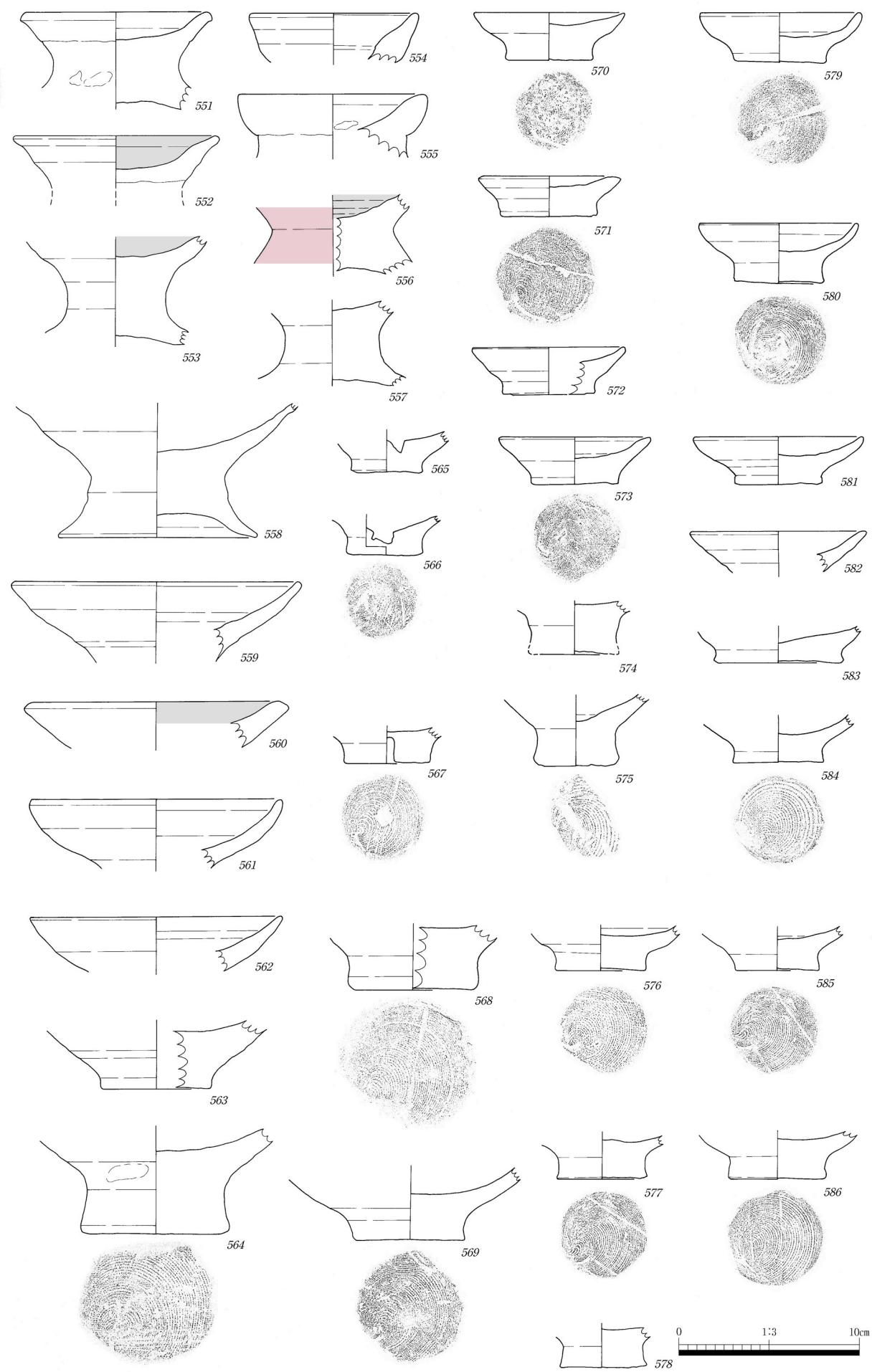
中世土師器は成形技法によりロクロ（551～721）と手づくね（731～1141）に大別できるが、さらにそれぞれ形態によって細別した。ただし破片のみで判断したものも多く、特に手づくね成形では微妙な形態差で分類したため、その境界が曖昧になった部分がある。

以下、分類ごとに記述する。個々の帰属については一覧表を参照されたい。なお、分類に際しては主に北陸中世考古学研究会による成果を参考とした。

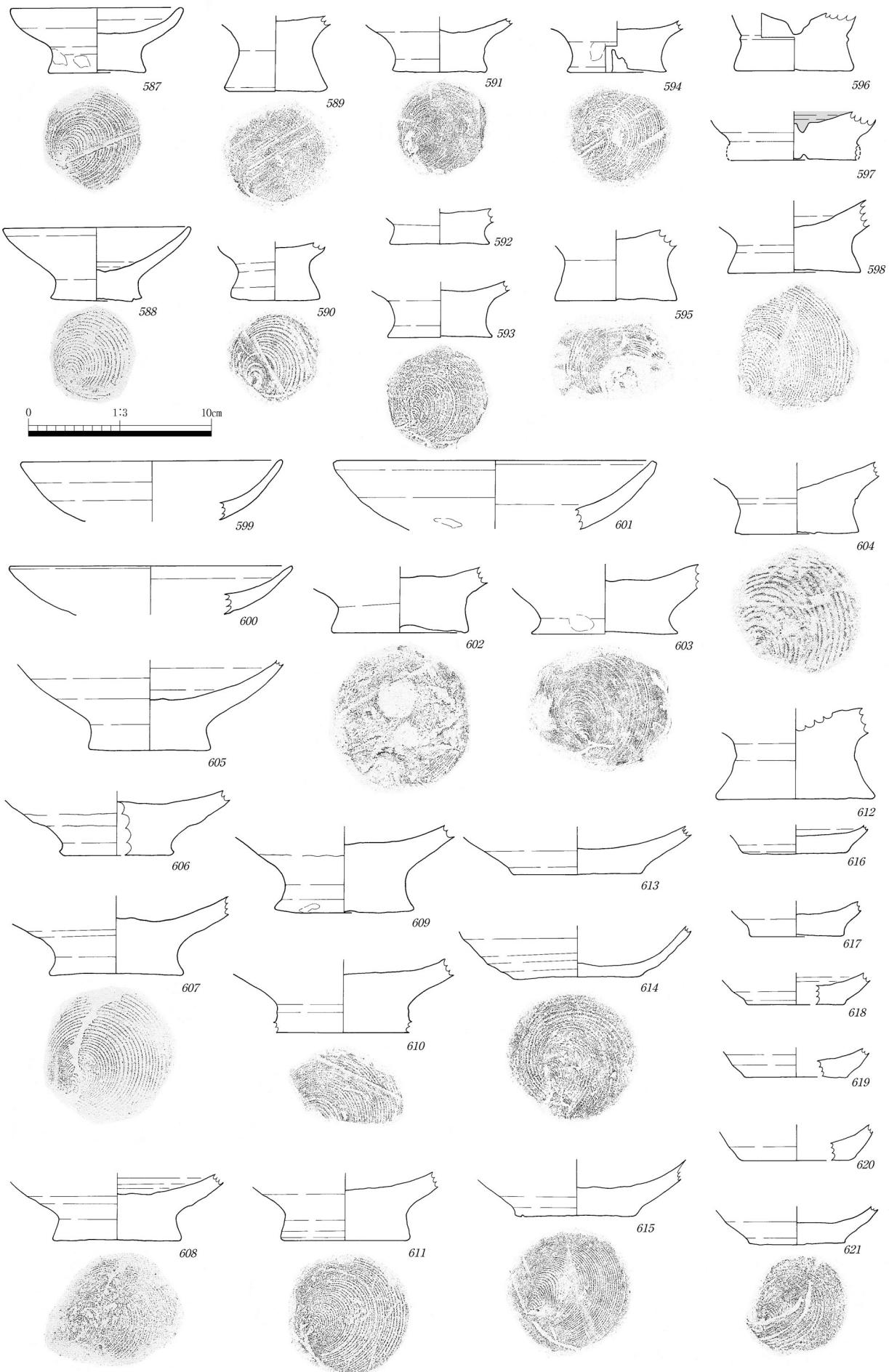
- ロクロ成形（R）
 - I 底部に糸切り痕がなく、端までロクロによって引き伸ばす
 - II 柱状高台（大小の法量差あり・高台厚は2cm以上が多い）
 - a 高台が直立か、やや裾広がり
 - b 高台が裾広がり、または接地面端部を水平方向に引き出す
 - III 底部から口縁部へと直線的に開く
 - a 口縁端部に向かい器壁が薄くなる
 - b 口縁端部まで器壁が厚い
 - c 口縁端部をつまみ上げる（aと判別しにくい）
 - d 体部中位にナデによる段（稜）が入る（手づくねの技法を模倣か？）
 - e 体部の立ち上がりが短い（コースター型）
 - その他 接地面端部に面取りあり
 - IV 底部から口縁部へ内湾している
 - a 口縁端部に向かい器壁が薄くなる
 - b 口縁端部まで器壁が厚い
 - c 口縁端部をつまみ上げる
 - V 底部から口縁部へ外反している
 - R ロクロ成形で全体が不明、分類できないもの

手づくね成形（T）I 平底一段ナデ

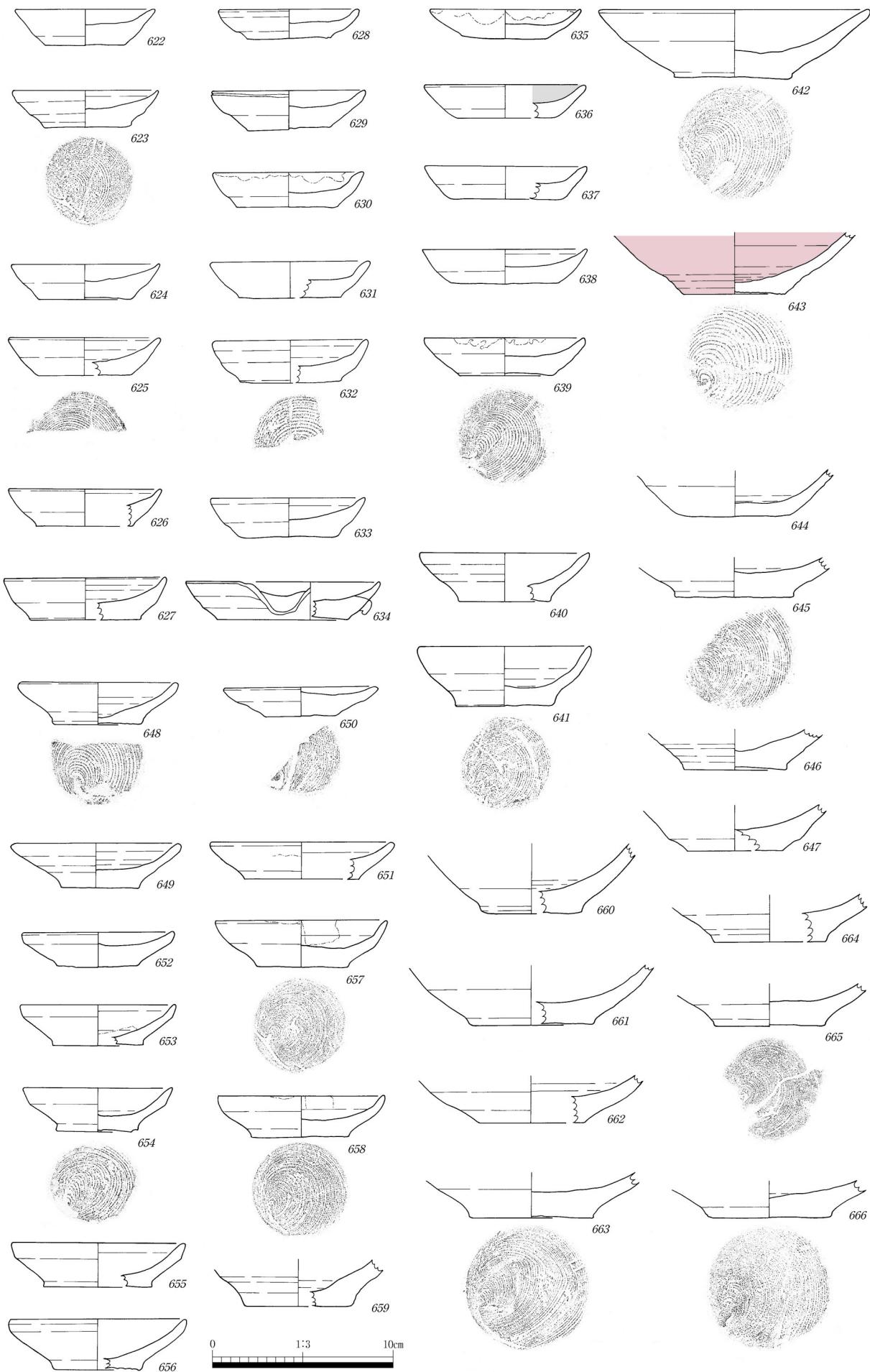
- a 口縁端部に面取り（断面三角形・方形）、またはつまみ上げ
- b 口縁端部に面取りなし
- c 口縁部が肥厚し、内面はナデによる凹凸が目立つ
- II 平底・丸底ともにあり、強いナデにより体部に段が生じる
- III 丸底一段ナデ
 - a 口縁端部に面取り、または上方へのつまみ上げ
 - b 口縁端部に面取りなし
 - c 口縁端部を薄く引き出す
 - d 口縁部が外傾～外反、または水平方向へ引き出す



第231図 遺物実測図

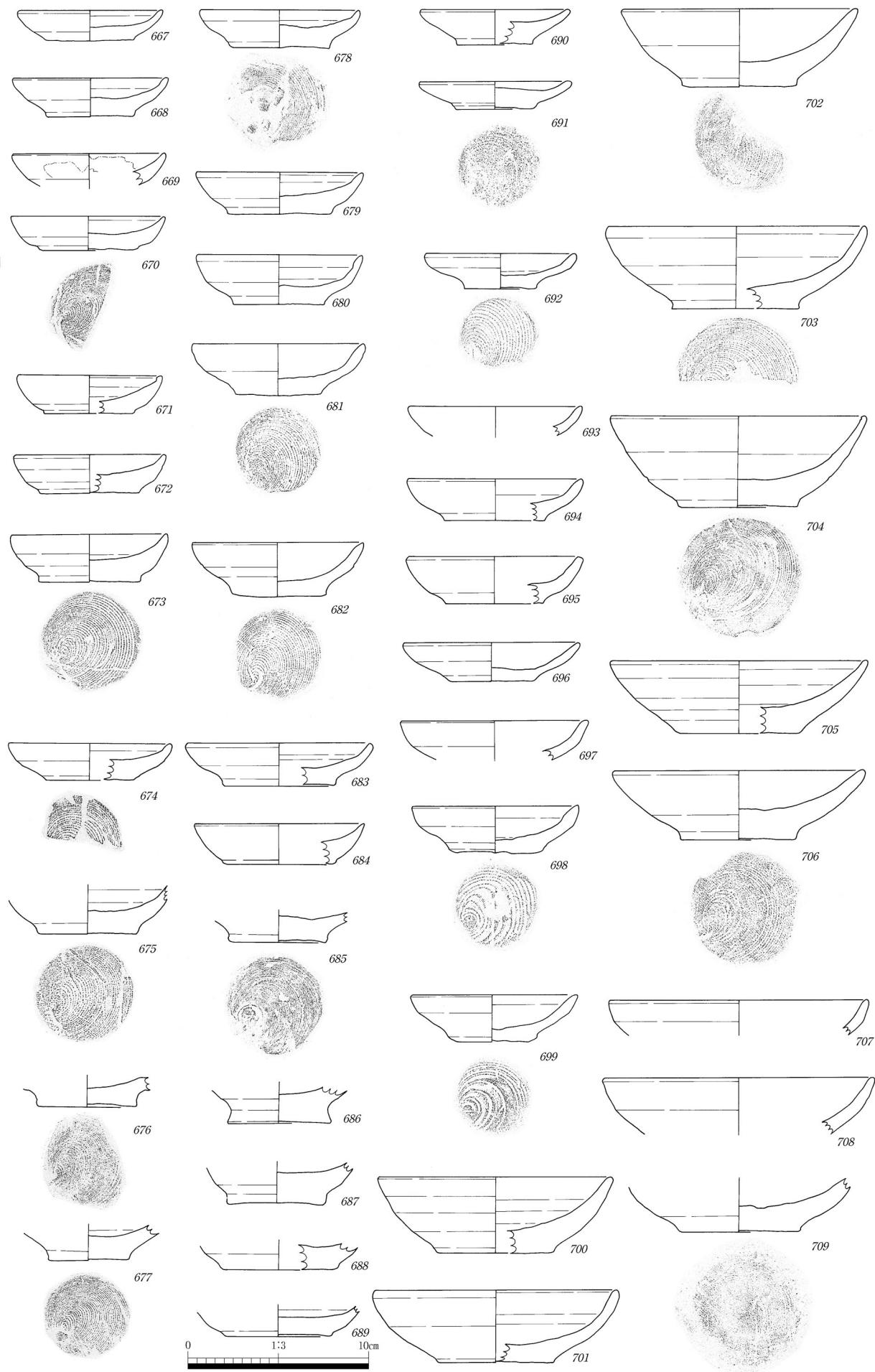


第232図 遺物実測図



第233図 遺物実測図

4 遺物



第234図 遺物実測図

R I (551~558) は、くびれ部に粘土接合痕があるものや、脚部から外れた皿部の底で糸切りを認めるものがあることから、皿部、脚部それぞれをロクロ成形した後、接着したと考えられる。端部までロクロ成形されており、一見すると皿部、底部の判断がつきにくい。556は内黒で外面赤彩される。

R II (559~598、602~612) はいわゆる「柱状高台」と呼称される一群であるが、皿部を欠損したものが多く全体の器形が不明であるため、底部の形態で細別した。ただし、意図的に裾を引き出すように成形したものと、重みによる変形とが混同している可能性がある。底部には孔をもつものがあり、565、566、596は内面、567、594は外面、597は両面から穿孔がみられる。内面の孔については灯芯を挿すためとの見方があるが、外面からの孔は用途不明である。

R III (613~659、725、726) は多様な形態を包括しており、口縁形態で細分した。体部が杯あるいは皿状の形態であるが、底部周辺のナデが弱い一群とも換言できる。634は口縁の一部を外側に折り返す。

R IV (660~709) も口縁形態で細分。椀状の体部をもち、R IIIに比べ底部周辺のナデが強い一群と換言できる。の中にも底部に孔をもつものがあり、710は貫通孔、711は両面から、712は外面から穿たれている。

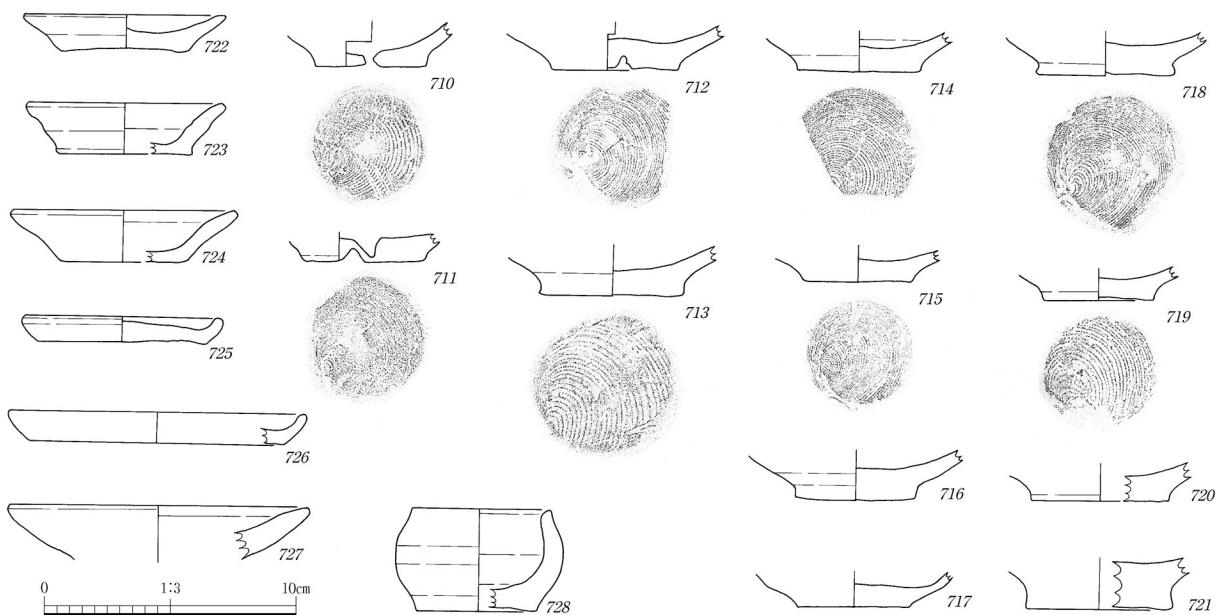
R V (722~724) は底部から外反気味に口縁が開く一群。いずれも包含層からの出土で、形態的にも新しい時期とみられる。

この他、細別できなかったものを R (599~601、727、728) として一括した。728はミニチュアの小壺または椀状のロクロ製品である。

T I (731~873) は小型が多く、薄手が目立つ。平底であるが、指頭による凹凸が残るものも多い。833は右回りの粘土接合痕が明瞭に残る。851は S E 82 B 11 出土で底部に「水」あるいは「永」の墨書がある。

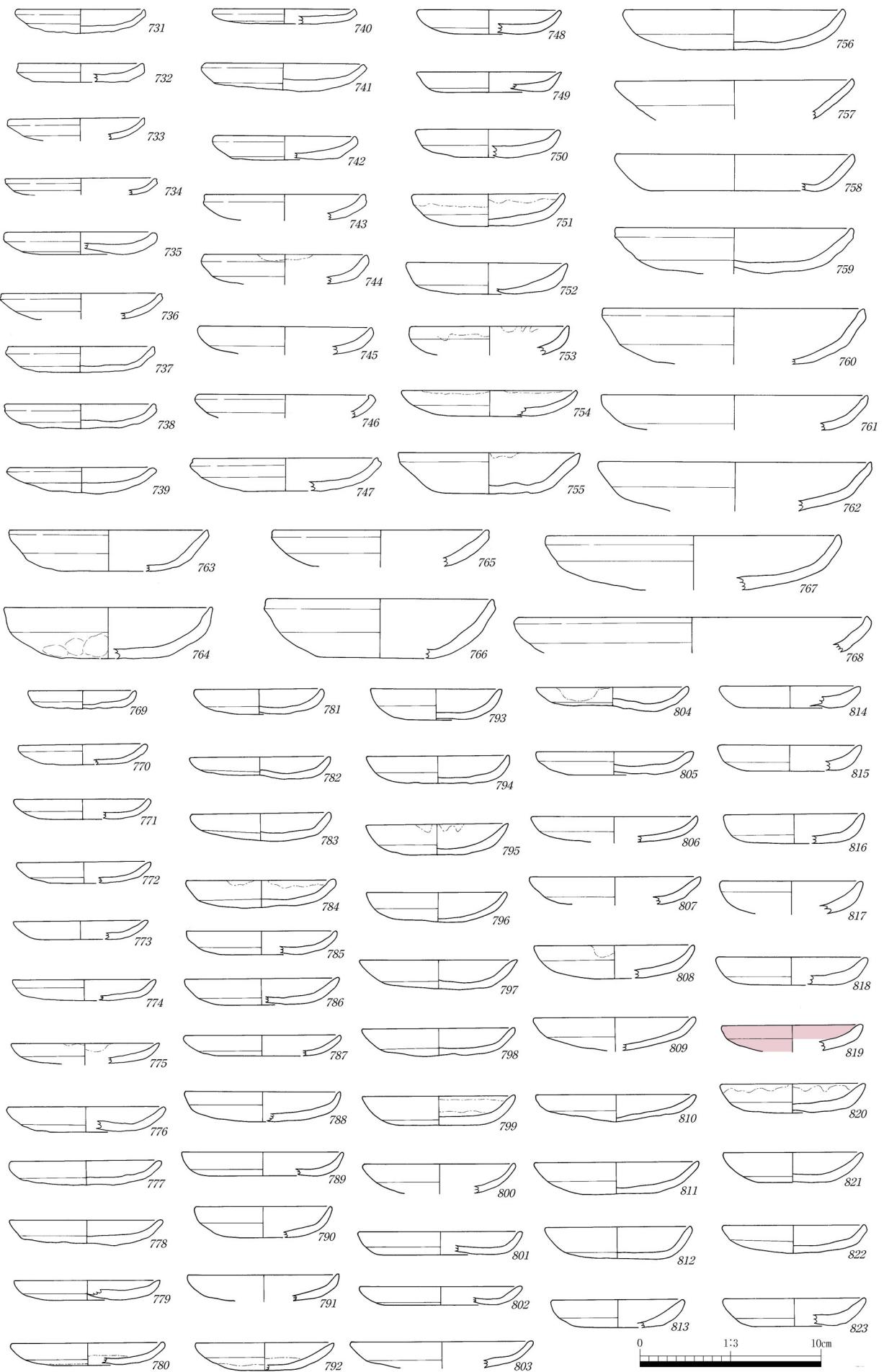
T II (874~915) は中~大型が多く、T I に比べ、やや深身である。

T III (916~1141) は最も多い。形態から 1131~1141 は時期が新しいとみられる。916~923、926~928には墨書がある。B 8 地区からの出土が多く、内容は漢数字が主体。974は底部に貫通孔。960は内面にハケメが残る。1136は内面に暗文状の調整痕がある。

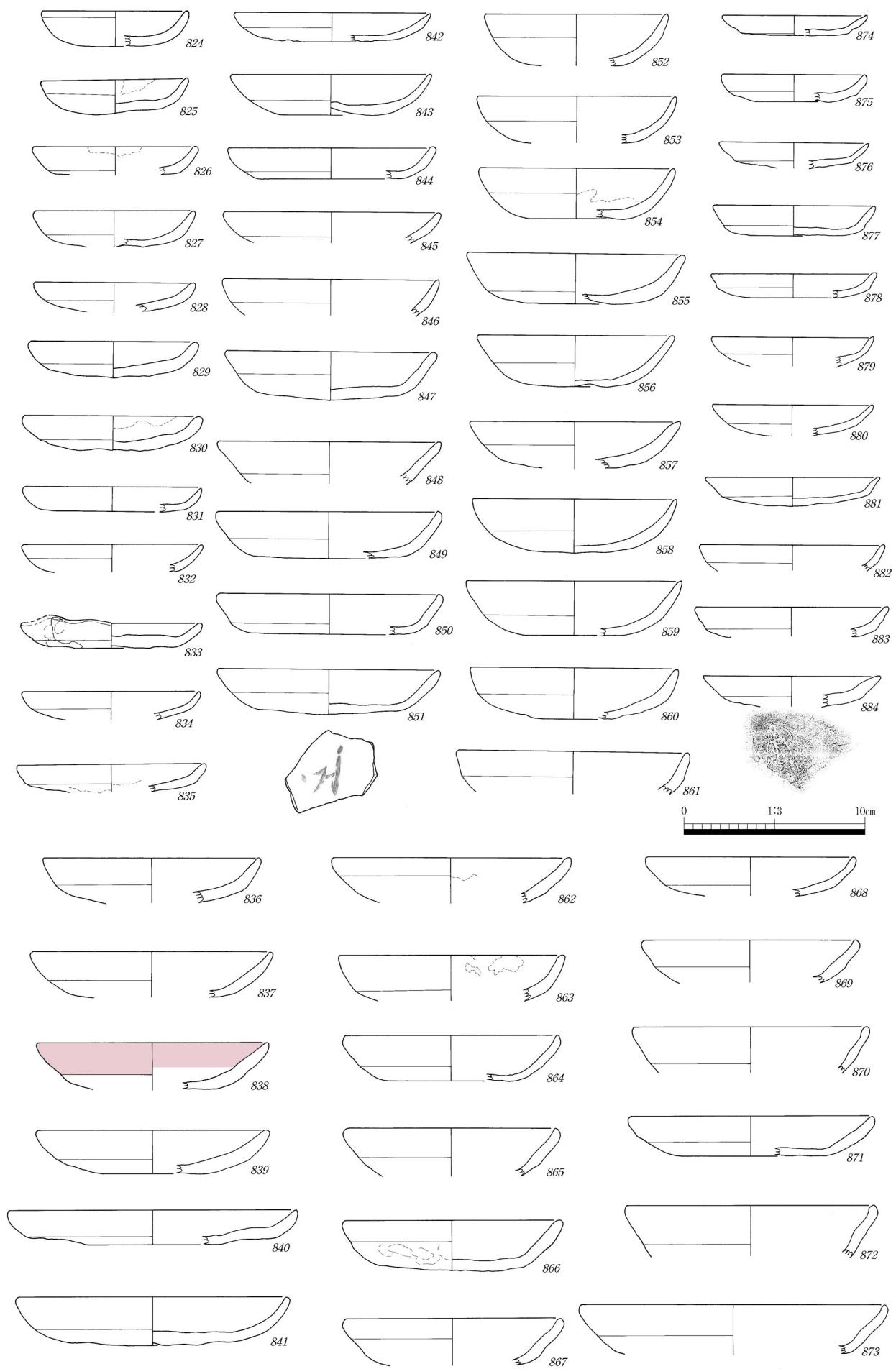


第235図 遺物実測図

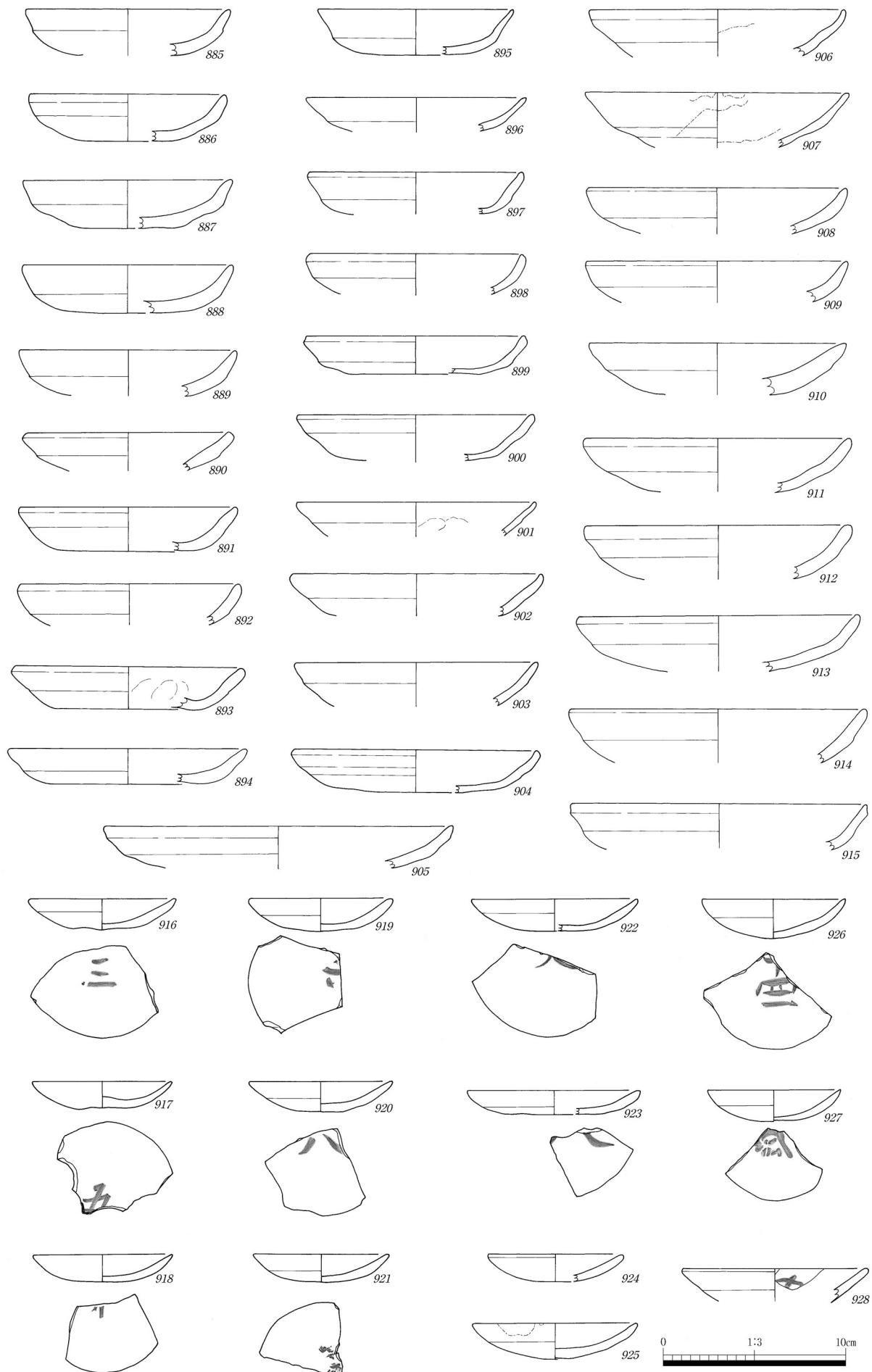
4 遺物



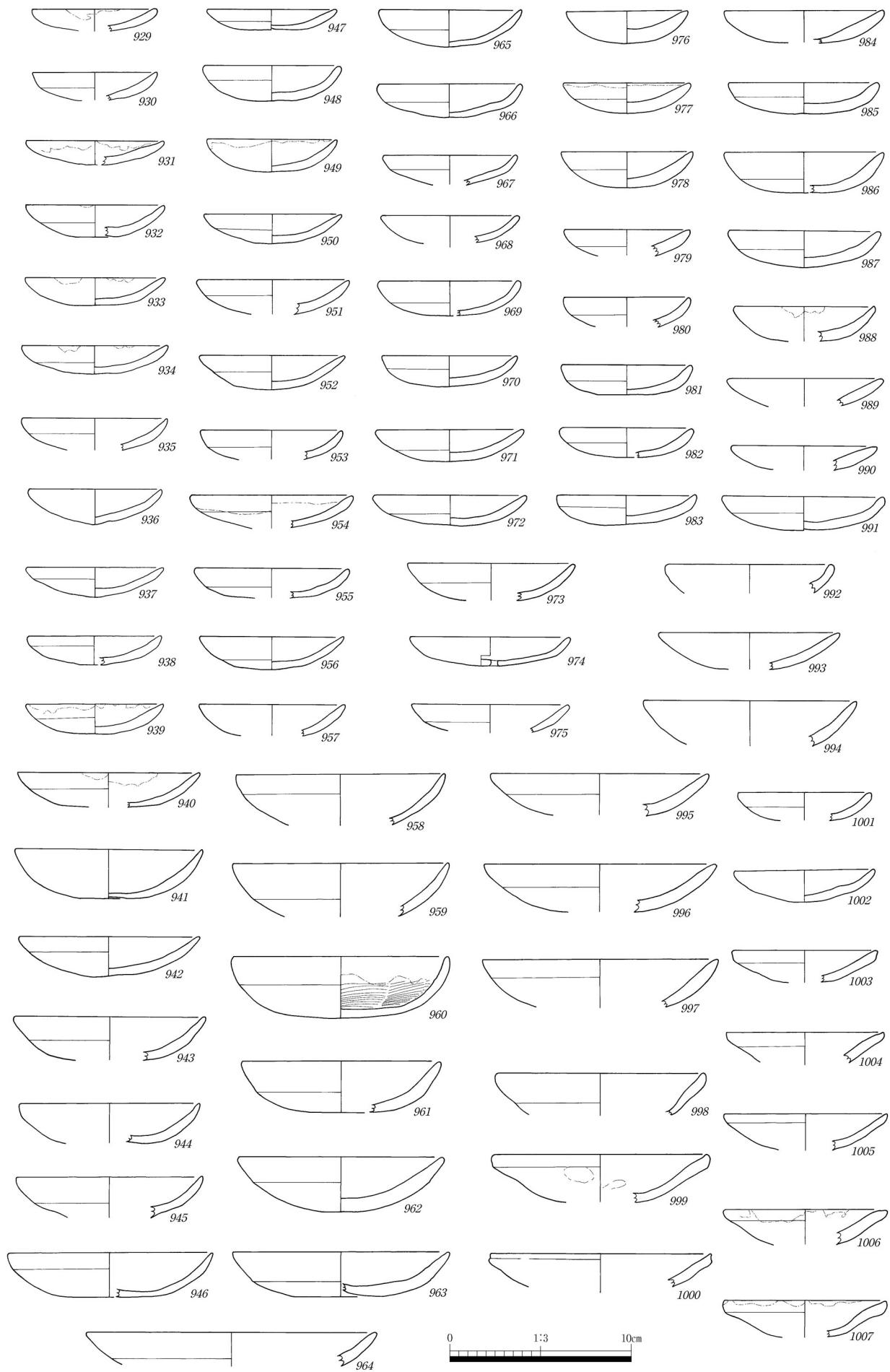
第236図 遺物実測図



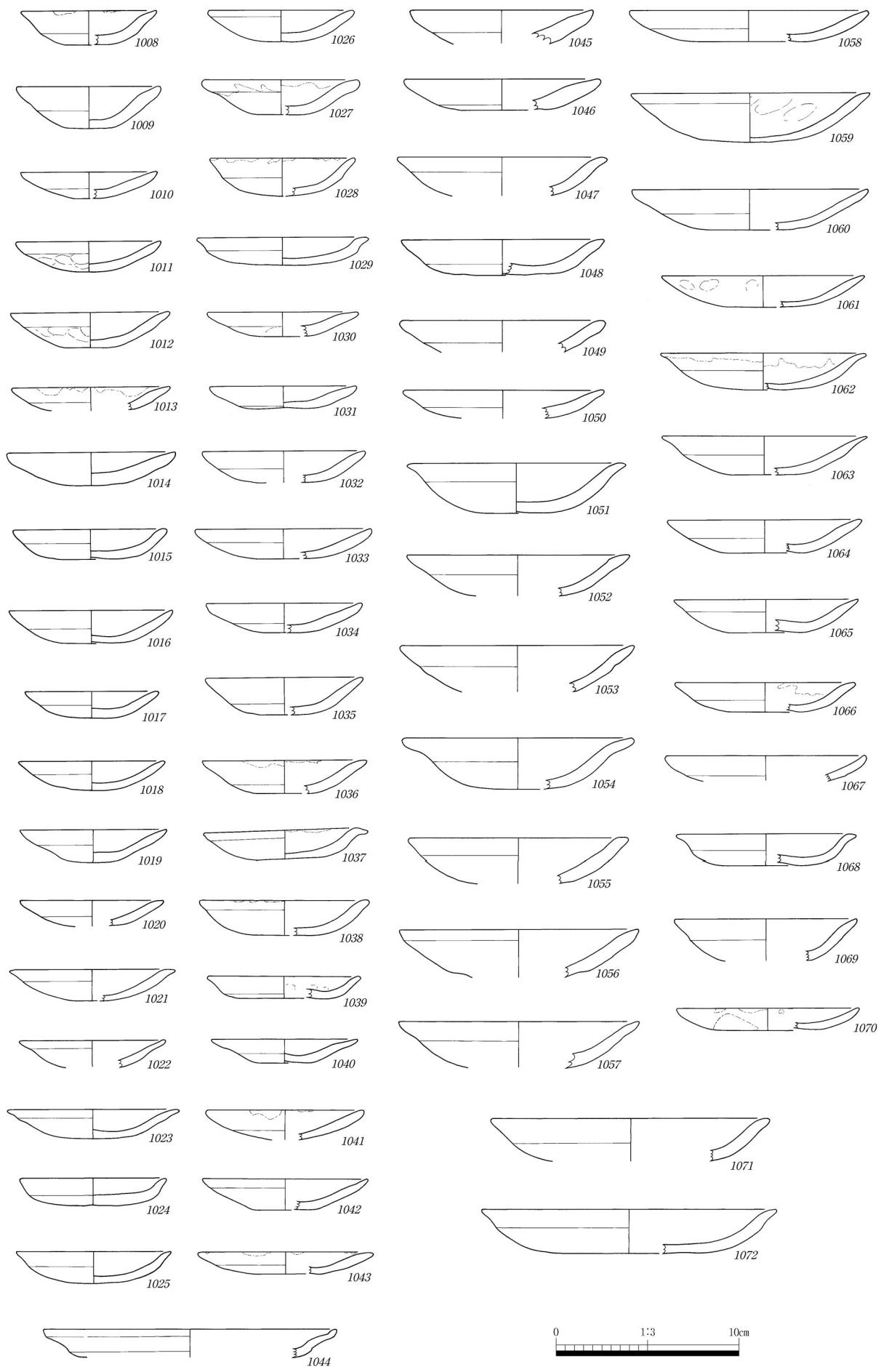
第237図 遺物実測図



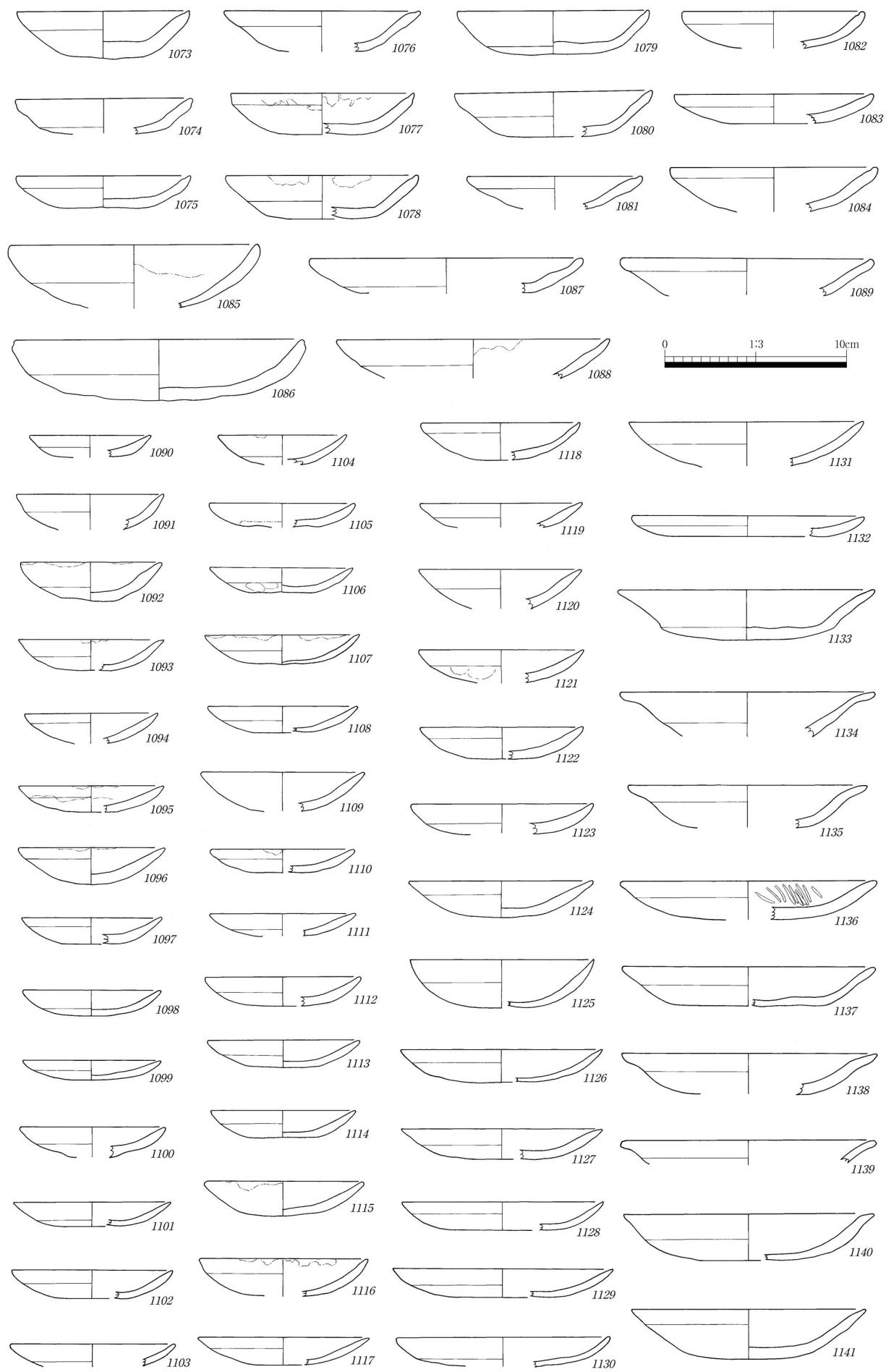
第238図 遺物実測図



第239図 遺物実測図



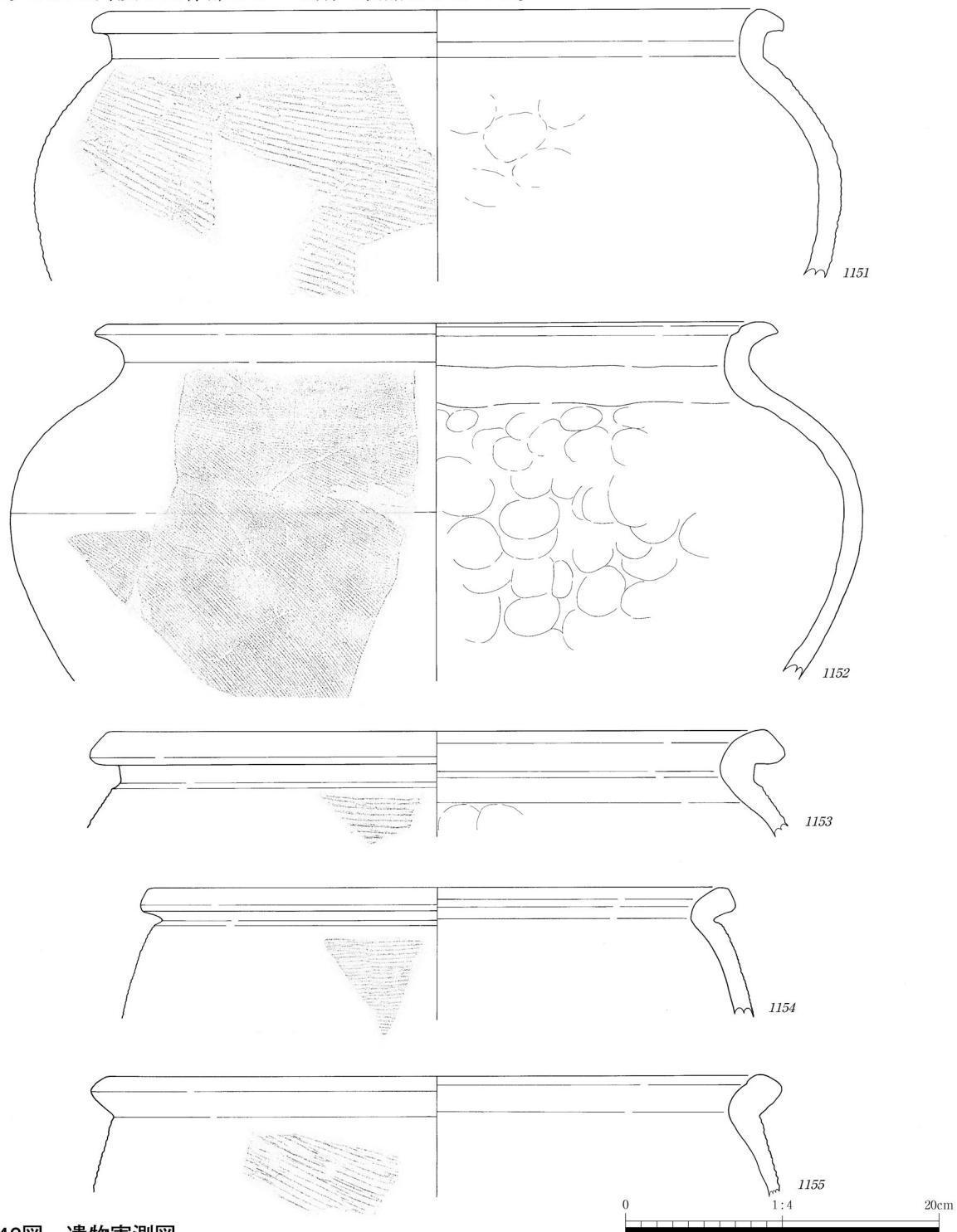
第240図 遺物実測図



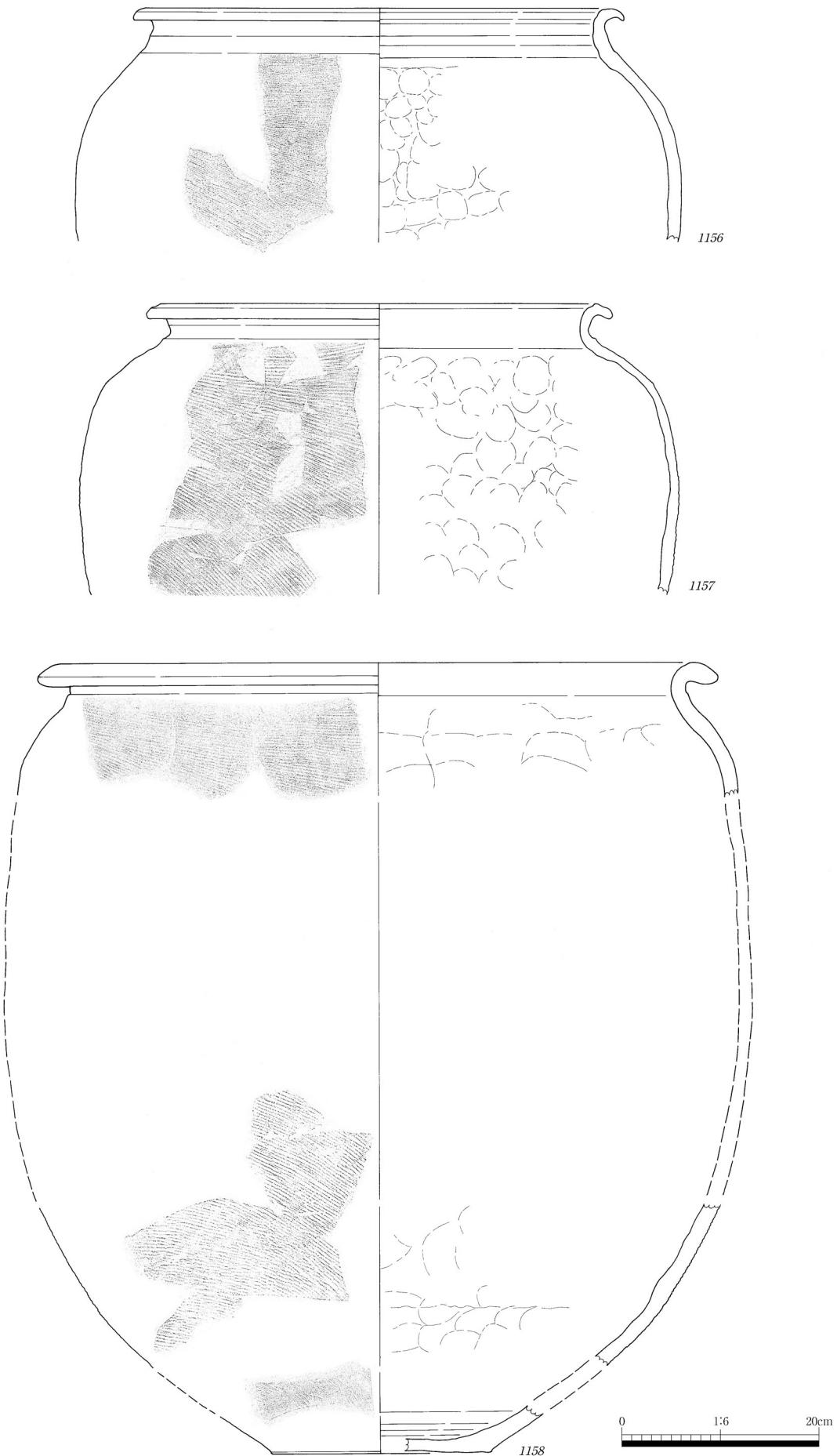
第241図 遺物実測図

珠洲 (1151~1277)

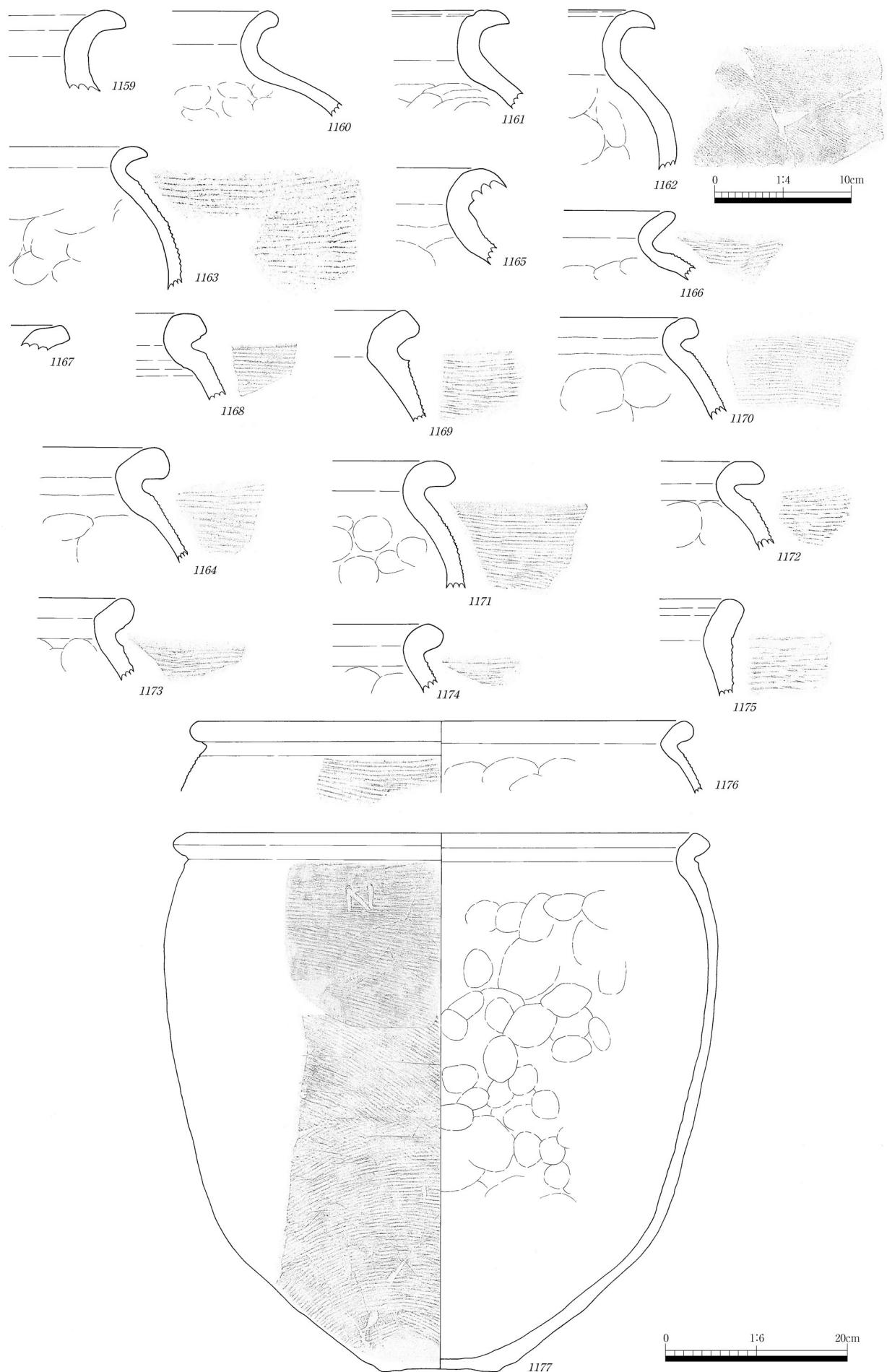
以下、吉岡編年^{註3}に基づき記述する。1151~1177の甕は、口縁形態からI~IV期とみられる。1152は肩部が強く張る球胴型。1177は肩部に「N」字状の刻文があり、SK83B10から潰れた状態で出土した。1178~1195は壺。調整はタタキ、ロクロ、肩部に波状文を施すものもあり、I~V期に属す。1182は水注、1189、1190は四耳壺とみられる。1195の内面には強いロクロ痕が残り、底部外面にはケズリが一周する。1196~1277は鉢。全時期の出土がある。鉢は最も多く出土した器種で、使い込まれた個体が目立つ。1204は9条の櫛歯原体で内面全面に短線文を散らす。1211は内面に線刻。1223は12条の卸目が放射状に入り、間には三つ巴文、花文が押される。1263は口縁部外面にナデによる稜が生じる。1277は外反した体部をもつVI期の製品とみられる。



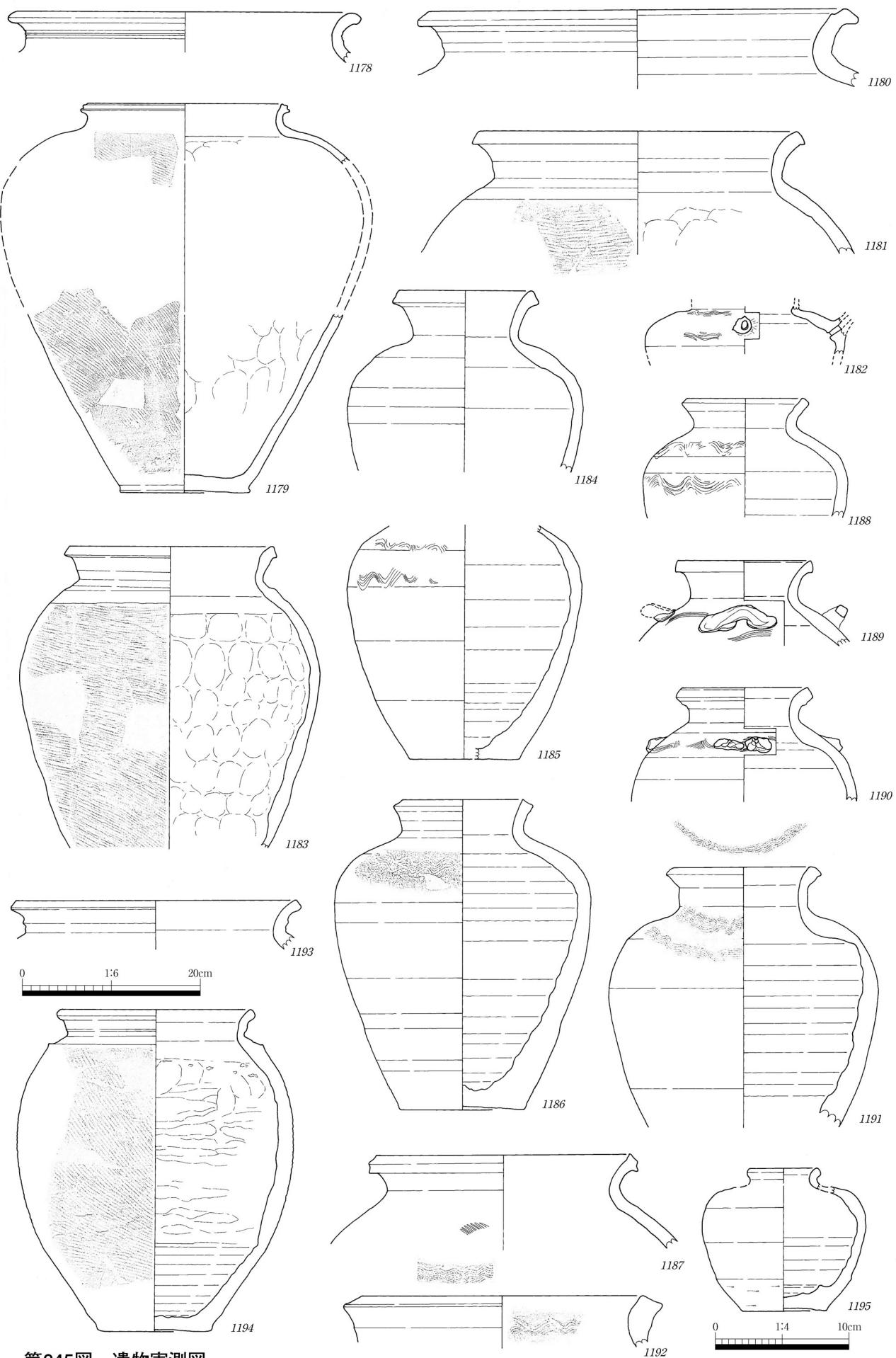
第242図 遺物実測図



第243図 遺物実測図

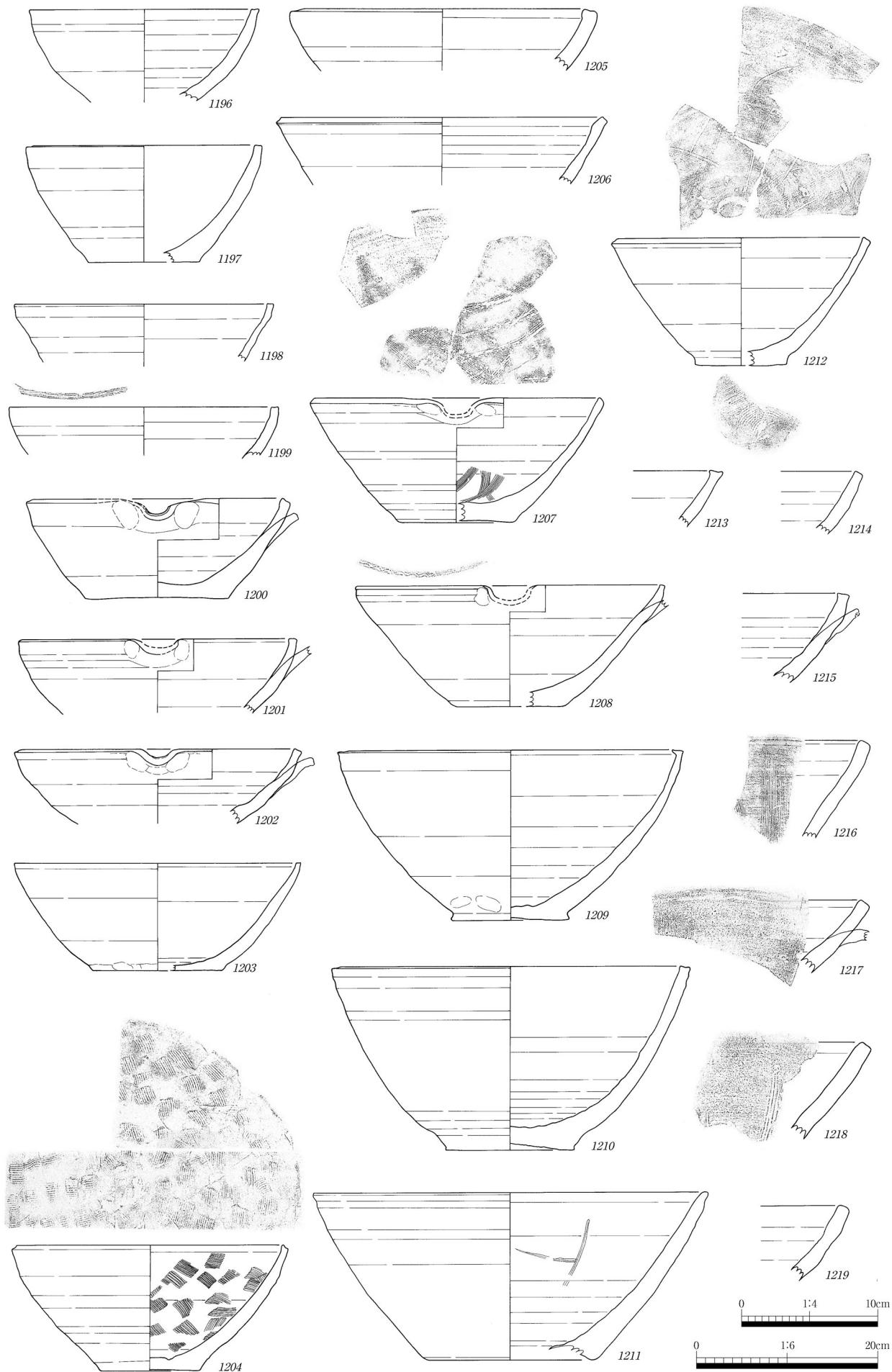


第244図 遺物実測図 (1159~1175 1/4, 1176・1177 1/6)



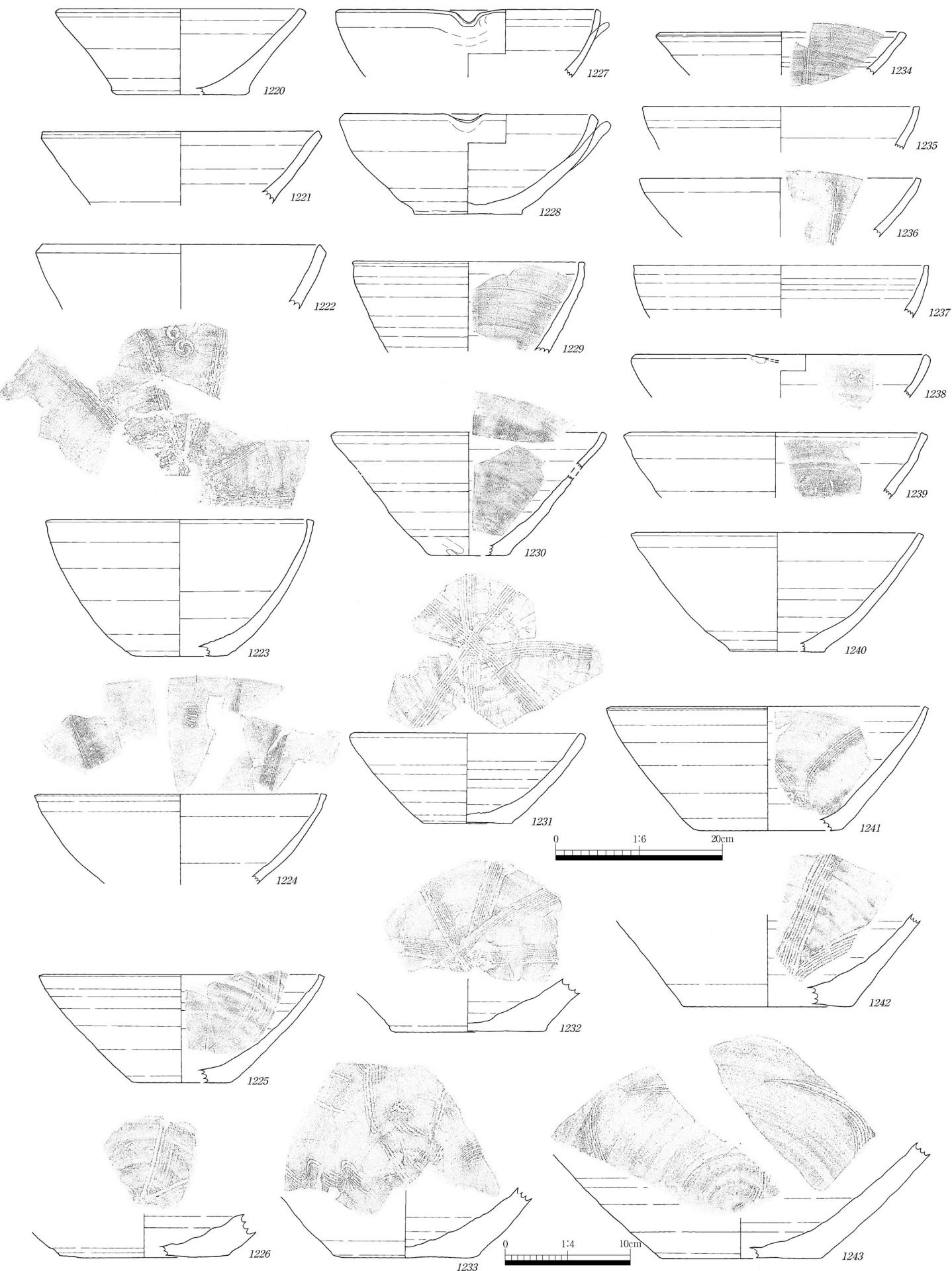
第245図 遺物実測図

(1178・1179・1183・1194 1/6, 1180~1182・1184~1193・1195 1/4)



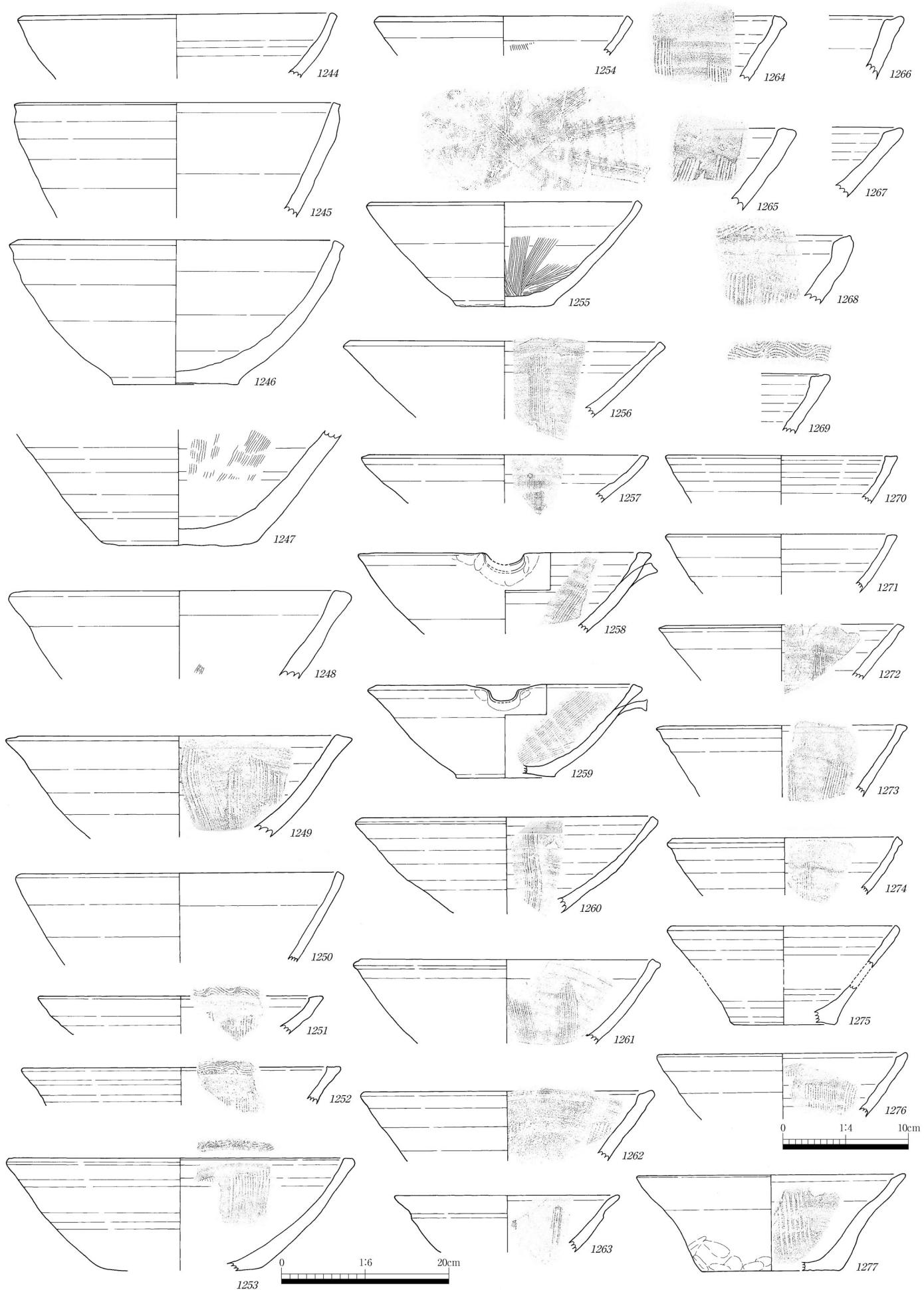
第246図 遺物実測図

(1196・1197・1200～1202・1205・1206・1209～1211・1213～1219 1/4, 1198・1199・1203・1204・
1207・1208・1212 1/6)



第247図 遺物実測図

(1220~1222・1226~1228・1232・1233・1242・1243 1/4, 1223~1225・1229~1231・1234~1241 1/6)



第248図 遺物実測図

(1244~1249・1262・1264~1269・1277 1/4, 1250~1261・1263・1270~1276 1/6)

中国製陶磁（1281～1423）

ほぼ全地区から中国製陶磁が出土しており、小片を含めると約330片を数える。分布には偏りがあり、C3、C4、C6地区をはじめとする北側の調査区では白磁が多く、青磁でも同安窯系の比率が高い。一方、南側を中心とするA、B地区では龍泉窯系青磁が多くみられ、白磁はわずかである。また、B地区では新しい様相の器形が目立つ。

これらの白磁、青磁、青白磁、染付（青花）については、平成19年度に山本信夫氏の指導を受け、分類整理を行った。以下、大宰府編年^{註4}に基づき、器種毎に記述する。

白磁（1281～1321）は碗、皿が出土している。

碗の口縁形態には玉縁状、嘴状などがみられる。玉縁は小ぶり、扁平、幅広、肉厚など個体差が大きい。嘴状の端部には、施釉後に口縁部周辺の釉を掻き取った口禿げもみられる。1292、1299の内面には櫛目文が入る。

皿では碗と同様の口縁形態のほか、内湾する体部内面に段を有する1307などがある。また見込みにヘラ描きの草花文をもつ1311や、沈線を巡らす1314、1315がある。1320、1321は坏か皿とみられる高台部分で、1321は4箇所に弧状の抉り込みを入れる。

青磁（1322～1362、1366～1408、1410～1423）は碗、皿、小盤、坏、壺など、多様な器種の破片が出土した。

1322～1336は同安窯系の一群で、釉は黄色味、茶色味がかった緑色が多い。碗は外面に縦方向の櫛目文が入り、内面には櫛目文のほか、ヘラ描きによる花文、ジグザグ状の櫛点描文を施す。皿は内面にジグザグ状の櫛点描文、ヘラ描き文が入る。

1337以降は龍泉窯系とみられ、釉の発色は青味を帯びた緑色が主体となる。

碗は最も多く出土した。1337は口縁に輪花を有する小碗で、内面に沈線が巡る。1340～1345、1348～1351、1356～1358は内面に片彫りの草花文や分割線が施される。1344は片彫り草花文と櫛目文が複雑な模様を構成する。1345、1366～1388、1392～1401は外面に鎧蓮弁文を施す。1345は蓮弁に櫛目が入る。1389は蓮弁表現が略化されたもの。1402は内面、1403は外面に1条の線を有する。1410は内面に型押し文がある。1412～1423は高台部分で、見込みのスタンプには草花文のほか1416では「太」の字が中心に入る大きな印花文がある。畳付きおよびその内部は露胎である。

1352、1353、1359～1362は坏で、施釉の厚いものが目立つ。1352、1359、1360、1362の内面には縦方向に凹面のケズリを入れ花弁としている。1361は細く尖り気味の高台で、施釉後、高台端部の釉を掻き取っている。

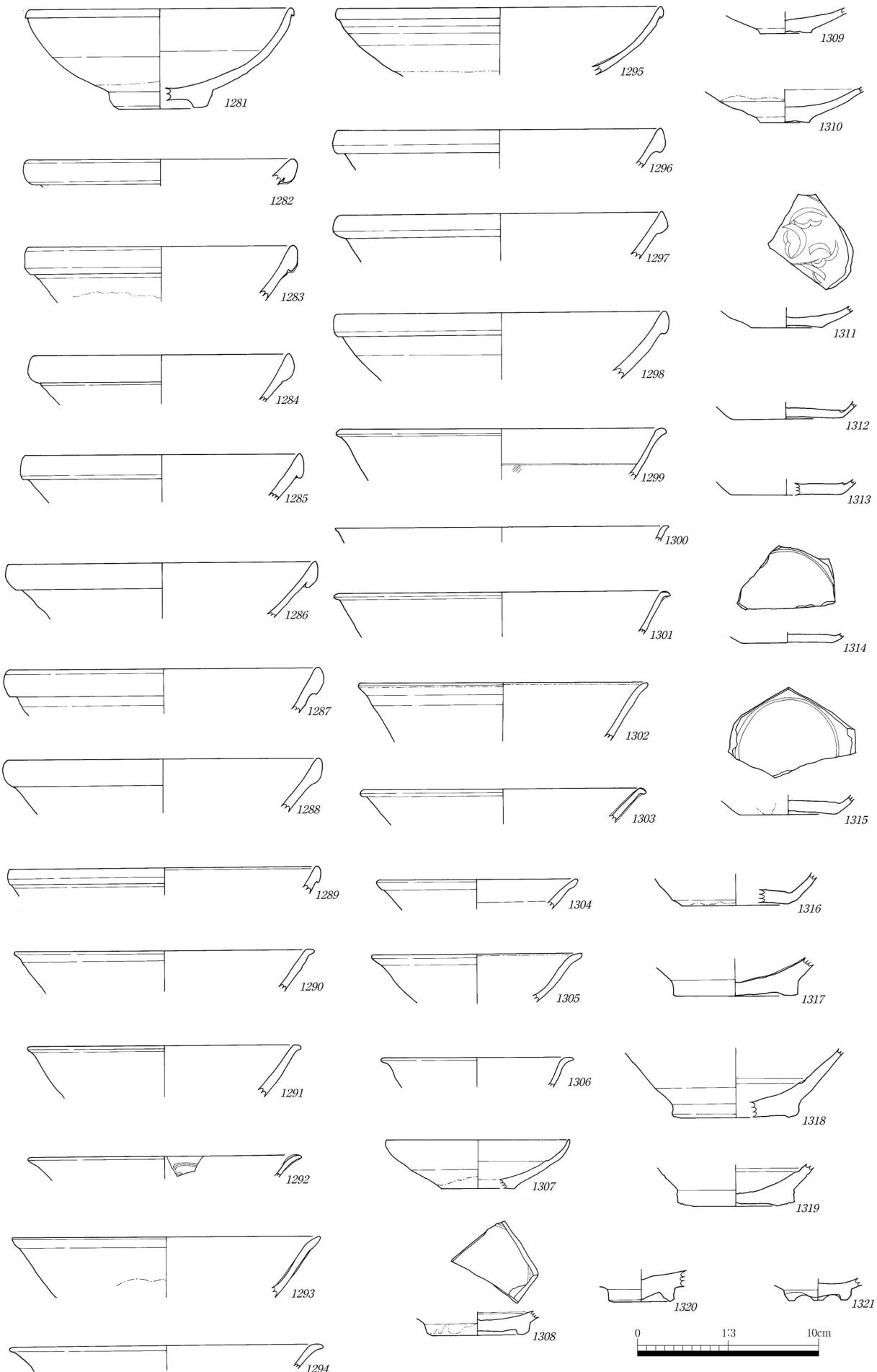
1354は小盤とみられる。

1404～1408は稜花皿。1404はSK35B11で漆器と重なり、完形で出土した。見込みには草花文とみられる模様があるが、釉が厚く不明である。

1411は酒会壺の下位部分で、鎧蓮弁文が一周する。

1363～1365は青白磁である。1363は壺型合子で、外面には区画の中に草花か雲状の模様が付く。1364、1365は合子蓋。ともに上面には草花文状の凸文が施され、1365の口縁部には蓮弁文が巡っている。

1409は染付（青花）の端反り皿で高台が付く。外面は渦状の唐草で埋め尽くされ、内面にはアラベスクと梵字を組み合わせた模様が描かれる。



第249図 遺物実測図